
チャンドラ - 中華街の星たち -

hanaco

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チャンドラ - 中華街の星たち -

【NZコード】

N1976D

【作者名】

hanaco

【あらすじ】

昭和四十年代、中国人、朝鮮人、日本人などがひしめく横浜中華街で生まれ育った僕は、日本人グループのリーダー的存在であった。当時中華街では日本人、中国人、朝鮮人、東南アジア、西洋人などの少年グループが、人種別にプライドと縄張りを守るために抗争を繰り広げており、僕もまた様々な少年たちと喧嘩に明け暮れる日々であった。ある日、そんな中華街に別の地域のグループが挑戦状を叩きつけ、中華街にたむろする少年たちを次々に襲いはじめた。そして、ここから悪ガキストリートギヤングたちの抗争が激化し、ハ

ラハラドキドキの物語は大きく展開していく。

プロローグ

ある日、じつと鏡を覗き込んだ。けして自分の顔に酔いしていたわけではない。

顔に散りばめられた無数の傷跡が、しわと染みにまぎれて目立たなくなっていることに

感心していたのだ。しかし、よくよく見てみると瞼の上の小さな傷が今でもくっきりと残

つている。昔から右目の中が少しばかり小さいのはこの傷が勲章の如くのしかかってい

たからだ。などと勝手に納得していた。

少年期、青年期にこじらえた喧嘩の傷跡などは身体中にこじくらでもあり、消えている傷

もあれば残っている傷もあるのだが、この瞼の傷が今でも不思議な感覚で脳裏に焼きつい

いるのは、この傷が中華街でのバトルの予告であったからだ。

それは昭和三十年代の後半、小学校一年の時のことだ。

驚づかみにされた両瞼に相手の爪がガツチリと食い込み、この傷はめでたく刻印された

のだ。僕にしてみれば物心がついて初めての大喧嘩だった。

相手は一学年上で中国系ハーフの一人組み、中華街周辺ではその学年の番長格という肩

書きをしようとした問題児であつたのだが、幼稚園の頃から知る彼らとの仲は良好だつたはず

だ。しかし、喧嘩の最中に瞼を先に切られてしまつては、ボクシングと同様に前が見にく

なつて大変不都合である。しかも一学年上を一人も相手にしていたら、目に流れ込む血を

拭つ度にパンチの雨嵐だ。しかし、最初から勝てると思つて始めた喧嘩じやないし、とにかく

かく目の前が見えない。

観念した僕はどうにでもして下すこと言わんばかりに腰をおろし、胡坐をかけて腕を組

むと皿を瞑つた。いわゆる破れかぶれ作戦だ。

しかし不思議とそこには涙も流さずにひょうひょうとしている自分がいた。すると、彼

らは攻撃の手を止めて僕の顔を覗き込み。

「エフ、大丈夫か・・・・?」

と、優しさは見せたもののばつが悪そうに逃げ帰ってしまった。

何が、大丈夫かあ。ちつとも大丈夫ではない。

しかし、彼らのその言葉だけで、全てを許していた僕は父親譲りのお人良しである。

帰り道、目の上から滴り落ちてくる血は止まらず、拭つても拭つても田の中に落ちてしまふ

た。そして、関帝廟通りから我が家までの路地になんとかたどり着き、玄関の格子戸を開

けた時には顔中が血だらけであった。

そんな僕を田の当たりにした母は驚愕して膝を床に落としていた。しかし、その傍らで

「喧嘩かあ、こりや、やられた顔だあ・・・」と、父は手を叩いて笑っていた。

父の言葉を間につけた母は僕の肩を揺すりながら原因の追究をし、相手の名前を聞き出

そうと懸命であった。僕は相手の名前だけは言ひのを拒み続け、黙

つたまま俯いていたの

だが、どうやら父は感ずっていたらしい。しかし、僕の黙秘も無駄に終わってしまった。

二人組みは不思議なことに一時間もしないうちに我が家に誤りに来てしまったのだ。

きっと彼らの脳裏に僕の父の顔が過ぎてしまつたのだろうが、父はそんな野暮な男で

はない、それどころか二人組みを前にとんでもない事を言った。

「ヤンにロン、案の定、お前さんたちかい、よく謝りにきたな。どう考えたって、お前さ

んたちが相手じや、うちのお坊ちゃんじや歯が立たねえやな。まあ、たまには気合を入れ

てもらわねえとな、」の辺りで生き残つていけねえしな。

けどな、一対一ってのはいただけねえなあ、お前さんたちが年上だらつと一対一のタ

イマン勝負だつたらいつでも相手をねじくるんだがなあ。どうで、謝りにきたついでに

もう一勝負するてえのは、すぐでもいいぞ。ヤンかロンか、どうちがやる? ハフ、もう

一度やれ

父のとんでもない言葉に母は『絶寸前にいた。ヤンヒロンは俯いたまま硬直しており、僕は、冗談じゃない、勝手なことを言つたな、そんな思いで俯いていた。

思えばその時、心の中に変化が現れたのは確かだ。なんともいえない爽快感と、これだけ殴られてもしつかりしている自分に自信がないものがメラメラと沸き上がってきていた

た。そして、先に瞼を切られると皿の中に血が流れこみ前が見えなくなる。先にやらなければ

れば喧嘩に勝てる訳がない。と、教訓し、先手必勝を心に誓つのであつた。

それ以来一学年上のヤンヒロンとの仲はそれまで以上に深まり、兄貴のように慕つよう

になるのだから皮肉なものだ。

そのうちヤンヒロンと同年齢のキートンやダイなども僕の味方的
存在になり、一緒にい

ることが多くなつていった。しかし、その後、中国系、朝鮮系のグループから狙われるよ

うになつていた。

思えば、人種的な蟠りもあつたろうが、僕がつるんでいたヤン、ロン、キートン、ダイ

といふ存在は、様々な人種の連中からしてみれば神様のよつに崇め、のちに中華街を牛耳

切つていく四天王であつたからだろう。彼らにしてみればそんな連中とつるんでいる僕を

許せなかつたのは確かだ。彼らは僕が一人でいる時を狙い「ことじ」とく襲いはじめた。

そのおかげで今でも背中越しからひくーーい声で名前を呼ばれるのが大嫌いである。振り

返りざまの事態がトラウマの如く脳裏を掠めるからだ。

確かにあの頃は振り返つたとたんパンチがとんできた。パンチならまだましである。バ

ット、鉄パイプ、角材などが飛んで来ることもあつた。だからか、呼び止められたら直ぐ

に振り返らず、なんでもよいから目敏い武器を探して素早くそこまで走り、それを握つて

から振り返るよつになつていた。さすがに今では当時の呼び名で僕

を呼ぶのは親戚ぐらい

なものだらうから、このような行動を起しそうとはないが、あの頃はそれが日常であり涙

で汚れている顔を悟られまいと、家の真裏になる勝手口のドアをそつと開け、半畳ほどの

上がり口右側に設置してある洗面台で顔を洗っていたことも度々あつた。

しかし、小学生低学年のその頃には激痛にながしていた涙も、日々悔し涙から復讐の涙

に変わりやがてそれは枯れ果てていった。そして、それを見かねた父の一言から全てが始

まつた。

「男はな、やらなきゃならねえ、時、つてもんがあんだ。お前さんがヤンとロンとやつた

時もそうだ。そんなに悔しいならやられることを恐れねえで、一人で男気つてもんを見せ

てこい。行つてこい！」

そう言つて父は玄関に立てかけてあったバットに向かつて顎を振つた。僕はバットを握

りしめ一人であるグリープの繩張りに殴り込んでいた。

*

*

*

昭和四十年代、世の中は暗から明へと移り変わり、三十年代からの好景気もさながら高

度経済成長の真っ只中にあった。

白黒からカラーに移りつつあったブラウン管の中では、クレイジー・キャッシュやゴント五

十五号などが走り回り、てなもんや三度笠やでんすけ劇場などの舞台演劇が世を賑わせ、

若者たちは髪を伸ばし始めラップズボンで街をかっぽし、ビートルズに狂喜乱舞し、GS

ブームに火がつきはじめていた。

そんな時代の最中、中華街では日本、中国、朝鮮、日中のハーフ、日朝のハーフ、東南

アジアなど異種多様なグループの少年たちが人種別に分かれ、自分たちのプライドを守る

為に連日の如くバトルを繰り広げていた。

その頃、四年生になつていた僕は、乱暴、やんちゃ、無鉄砲と三拍子のレッテルをはら

れるほど逞しく育ち、仲間も多い代わりに敵も増え、幼い頃からの相棒であるケンと共に

日本のグループを強化し、喧嘩になると僅か五人で立ち向かついた。

中華街は入口の善隣門から中山路、香港路、市場通り、上海路と四つの十字路からな

り、その十字路を長安道、関帝廟通り、広東道、元町へと続く南門通りが取り囲み、その

他にも様々な名称を持つ通りや路地が枝のように延びている。

その中で当時から一番活気があつたのは、ほぼ中部に位置する市場通りであった。現在

この通りは中華料理店が軒を連ね観光客の往来が激しい通りだが、当時は観光客だけでは

なく地元の買い物客で賑わっていたから活気だけは劣つていなかつた。今でこそこの通り

も中華街大通りからの延長と化しているが当時は多種多様な業種の店が建ち並び、商店街

なる賑わいを見せていたのである。

そんな通りや路地がそれぞれのグループの縄張りとなり、それは通り、「とにかくつちり」と

分かれていた。その中には暗黙の了解的なフリーゾーンと二つの危険ゾーンが存在した。

フリーゾーンは主に香港路、上海路、関帝廟通り、広東道、南門通りや様々な路地を示

し、東南アジア系の縄張りである長安道などもこの部類に属していた。このフリーゾーン

は主に年上の連中やハーフのグループが支配していたため僕たちにとっては比較的安全で

あつたのだが、中国系グループが縄張りとする中華学校を拠点とした中山道、朝鮮系グループ

が縄張りとする市場通りの延長になる朝鮮マーケット通り、そして、日本のグループ

が縄張りとする市場通り、この三本の通りが危険ゾーンで文字通りこの三グループの抗争

が一番激しかった。

そんなグループの中でも日中のハーフ、日朝のハーフ、東南アジ

ア系などは日本の小学

校に通つてゐる連中も多く僕たちとの関係も比較的良好であつた。その中に朝鮮系ハーフ

のリョウという少年がいた。学校やこの周辺で右に出る者なしと言われたほどの強者であ

つたのだが、群れを嫌いどこかのグループにも属さず牙を向いた一匹狼的存在であつたのだ

が、僕とは馬があい年上と絡んだ時には力を貸してくれ、僕たちのグループの影の親分と

もいえる存在であつた。

こんな連中がうじょうじょうくるのである。一人の時は要注意だ。
とくに路地裏を歩く時

は、後ろを振り返りながらあるべし、神経を研ぎ澄ませながら歩くべし、これは鉄則で

あつた。この撃を自分で破つた時には「ガツツーン」と、後頭部に衝撃が走る。僕はた

まらず頭を抱え込んで両膝を地面に落とし「い、い、い」のやうな
なんてふらつきながら

振り返つてもそこにはレンガを投げ捨てながら「ざまあみろー」など可愛いことを言つ

てうれしそうに舌を出して逃げていく連中の姿が震んで見えるだけである。それでも追い

かけようとすれば頭に激痛が走り、首筋に汗のようなものがツーと流れ、そのうち背中が

生暖かくなりそれが冷たく感じたころにはシャツの背は血だらけであつた。

そして、時には路地の影から田の前に角材が振り下ろされた。『残念でした、ばあか』

と、角材を握りしめている相手の股間を蹴り上げ、尻餅をついている相手の顔面にもう一

発蹴りをお見舞いしようと足を上げた瞬間、相手は握っていた角材を僕の可愛い足に向か

つて下から振り回し、角材はみごとに僕の足に命中した。

いつもであれば角材が当たった感触などアドレナリンが消していくのだが、明らかに

当たった感触よりも刺さった違和感を覚えた時には激痛が脳天まで走り抜けた。まさか角

材の先に五寸釘が打ち込んでは思っていないではないか、しかし、上げた足をその

ままにしておくのはもったいない。僕は相手の顔を蹴りおろし靴のつま先を相手の口の中

につつこみながら反省をするのだ。

しかし、そう度々頭をレンガや鉄パイプで殴られていては悪い頭がますます悪くなる。

時には突然の奇襲に対して逃げるのも仲間を集めるための作戦の一つであった。路地から

路地をにげまくり「アーアーアー！」と、大げさに声をあげて市場通りを走り抜ければそ

のうひ必ず路地の影から正義の味方が現れるのだ。それが相棒のケンや三ばかトリオであ

つた。

十mほど先には鉄パイプと黒いバットを這わせながら、ケンが、ハツ募村のたたりじや、

の如く走ってくる。しかも黒いバットは僕の愛用のもので、わざわざ我が家に戦闘基地ま

で行つて持つてくれるのだ。

「ケン君、いやケン様よくぞ現れてくれた！」

僕は即座にバットを受け取り一矢りと振り返り、逃げていく彼ら

を追いかけまわし愛用

のバットでぶつたたいてやるのである。するとそのうち「ガリガリガリ！」っと鉄パイプ

を引きずる音が響いてくる。それが三ばかトリオを中心とした僕の仲間たちであった。

この音は僕たち日本のグループが殴りこみにいく際に威嚇のために鳴らす音であったの

だが、相手はこの音が聞こえたとたん逃げてしまつて、これからいきますよおつてわざわ

ざ知らせに歩いているようなものである。しかし、当時の僕たちはそれが自分たちの存在

を示すための絶好の手段だと思い込んでいたのだ。

彼らも僕たちも中華街の路地を知り尽くしていた。彼らが逃げれば僕たちが追い、僕た

ちが逃げれば彼らが追いかけてくる。時には僕たちの溜まり場である台南小道の路地裏や

家の玄関にまで爆竹を投げ込んでくる始末である。そうなると迷路の如き路地は戦場と化

し抗争はエスカレートしていくばかりであった。しかし、この抗争は外だけのことではな

く家にいる時でも油断がならなかつたのだ。

我が家は近所は中国系の家族が多く、家の佇まいも洋風的な家がほとんどであった。だ

からか我が家は内装は当時の日本家屋と比べると変わつていて、一階の部屋のほとん

どが板張りで、寝床にしていた一階の六畳間が唯一の畳部屋であった。その部屋と並んで

洋服職人の仕事部屋があり常時四、五人働いていたため、一階の台所兼用の部屋が食堂の

役割をしていた。そして、一階の半分近くが事務所になつていて、ローテーブルを挟んで

二人掛けと一人掛けのソファーアーがあつた。一人掛けのソファーアーは僕のお気にいりの指定席

になつていて、時には戦闘基地として重要な役割を果たしていたのだ。

僕が家でおとなしくしている時は、このソファーアーを玄関に向けて腰をおろし、右田でテ

レビを見ながら左田で玄関を監視していた。監視といつても泥棒を捕まえて退治してやう

うなどと意気込んでいるわけではない、僕にしてみれば泥棒よりも
数倍厄介で鼻の穴を闘

牛の如く膨らませた様々な人種のグループがやつてくるからだ。

その中でもティ、コシジン率いる中国系のグループやキム、ヨン
ホウ率いる朝鮮系のグ

ループは頻繁にいらしてくれるのだ。たいへん気が荒く怖いお坊ち
ゃん方である。彼らは

僕が家にいると匂いを嗅ぎつけでは玄関の向こう側で待ち構えてい
た。俗にいう殴り込み

である。幸い、彼らは家の中の様子を伺っているだけだ。僕の仲間
なんぞは入るなと言つ

ても勝手に上がりこんでくるし、我が家を避難所と感違ひしている
少年たちが血相を変え

て逃げ込んでくるような家なのだ。僕としては遠慮しないで堂々と
入ってくれればいいと思

うのだが、彼らが我が家の境界線を越えられないのには理由があつ
た。

僕のお気に入りのソファーは殴り込みに来た連中を追つ払つため
に大活躍をするから

だ。ソファーの下、二十七mほどの空間には今まで集めた様々なア

アイテムが、早く使って

くれどばかりに転がっている。スパナ、ドライバー、トンカチ、クギヌキ、バット、鉄パ

イプ、パチンコ、銀玉鉄砲、そしてかんしゃく玉に爆竹。これらは護身用のアイテムだ。

心優しい僕にしてみればこんな野蛮な道具は使いたくないのだが、めんどくさいになると

玄関の戸をいっきに全開にしてソファーへ戻り、座つたまま飛び道具の雨嵐だ。そしてパ

チンコを取り出し火薬の入ったかんしゃく玉を近所の塀に打ち付けて威嚇攻撃をし、時に

は直接お見舞いしてやる。それでも帰っていただけない場合は、中国の爆竹に火をつけて

外へほつぼり投げてやるのだ。すると怖いお坊ちゃん方は姿を消してくれるのだが、気が

すまないお坊ちゃん方が多く、迷惑なことにまた戻つてくるのだ。すると手には角材や鉄

パイプやレンガなどを握り、中国の太鼓のバチを振り回し、僕の可愛い顔にぶつけるつも

りでいるのか、鉄の如く磨き上げた土だんじを握つてこむお坊ちゃん

んもいる始末である。

しかも最後には「エフ、出て」——「などと震ふるほどの恐ろしいことを言つ。僕

としてみれば常時十人以上はいる連中の前に好きこのんで出て行けるわけないではない

か、できることなら明日に延ばしてくれればありがたいのだが、気の短い彼らは待つてく

れない、その時代に携帯があるはずもなく仲間を即座に集めるわけにもいかない。僕は

観念して外へ飛び出しお坊ちゃん方をぶつ叩いてやるのだが、彼らが我が家の境界線を越

えられないのにはもう一つ理由があつた。

当時、中華街周辺で様々な事業をしていた父は、別にも事務所を構えていたため我が家

の事務所は事務的な機能はしておらず、父の仕事に関わる人たちの憩いの談話室のような

状態で、やたらと人の出入りの激しい家であった。それこそ僕がない時に家の前をつる

ついていたりすると、鬼瓦のような顔をした氣の荒いトラックの運ちゃんや、港の船舶関

係の男たちと混じって社長などと呼ばれている父までもが、怖いお坊ちゃん方をむりやり

事務所の中にひっぱりこんで、暇つぶしど酒のおつまみがわりの餌食として可愛がってし

まうことがあるので。しかも、父などは一風変わり者で、生まれは浅草の江戸っ子で江戸

弁と浜弁が交じり合った言葉を使い、声がでかい。しかも大正生まれにしては背が高く肩

幅が広く、シャツの襟を背広の上に出し、ハンティング帽に薄色の度つきサングラスを掛け

け、足底を地面にこすりつけながら偉そつと歩く、父と街中を歩いていると怖そうなチン

ピラのお兄さんが寄ってくる。とこつか父が寄つてこくのだ。そしてそれ違にざま「ば

つかやううー 金持つて来ー!」と、とんでもない挨拶をする。その光景たるやどりが

それ者なのか判らなくなる。だからかしばしヤクザ者と勘違いされる」と、指の先が一

部欠如していたことと何か関係があるのでつか、僕は父を不思議な思いで見上げてい

た。しかしそんな父も子供を見ると田が輝き、からかってばかりいて元来ののんき者のお人好しは隠せずにいた。

そんな男どもが頻繁に出入りしている家である。殴り込みに来た怖いお坊ちゃん方は狂

犬の如く家の前をうろつき僕の出方をじっと伺っているのだ。

それでも彼らが度々やつてこられたのは僕の母の存在が柔らかだつたからだろう。母は人

種差別的思想を嫌い誰にでも公平に接し、誰でも家に入ってくれる。家にやつてきた連中

が鉄パイプや角材を握つていようが、レンガを担いでいようが母の目から見たら僕の遊び

仲間程度の意識しかなかつたようだ、まさかこの少年たちが自分の息子に敵意を持つてや

つてきているとは思つてもいなかつたのだろうが、その頃になつてやつと氣づいたのだ。

まつたくをもつて非常識な父に比べ常識や思想も正反対な人である。大きなお世話かも

しれないが、その頃の僕にはヤクザな父とお嬢さん育ちの母が何故

一緒にいるのか不思議

であった。僕の推測ではお見合い結婚だったらしいから、父の言葉巧みな話術にまんまと

騙されたにちかいない。

そんな母の日常は職人たちの食事の用意をし、事務所に出入りする仕事関係の人たちの

相手をし、犬や十匹以上いた猫の世話をしたりと忙しく動きまわっていた。しかし女性に

は珍しく理数系にめっぽう強い人で、若い頃には学校の先生をしていたほどのインテリ

だつたらしいのだが、青春期の混乱の最中夢を実現することはできなかつたようである。

そんな母の気持ちとしては僕を勉強のできる文学青年的な方向に育てたかったようだ、

忙しい合間をみては僕の通う小学校に顔を出し、PTAの役員、親睦会、運動会、遠足と

ありとあらゆる行事に参加し、毎日のように僕に勉強の基礎を教えこもうとしていたが、

教えれば教えるほど母の悩みは大きくなり期待はことごとく裏切られていった。

僕は仲間たちとの遊びと喧嘩に明け暮れ、それは年々エスカレートするばかりであつ

た。そんな僕を見るたびにお嬢さん育ちの母は歎み、ため息をつき、父を恨む日々を送り

ていたのだ。何処をどう聞違つたのか、母の影響を素直に受けなければ文学青年も夢では

なかつたのだが、どうやら一人っ子の僕は母よりも父といの中華街の影響をどつぱりと受け

けて育つてしまつたようである。

・ · · · · プロローグ 完 · · · ·

第一章 ケンと三ばかトリオ

「ケンと三ばかトリオ」

穏やかな日差しが教室の窓側に優しく降り注いでいた。

どうやら中央部の窓が微妙に開いているらしく、束ねられたクリーム色のカーテンが緩

やかに揺れている。そんな穏やか光景を授業には耳もくれずになんとなく眺めていた。

退屈である……

この退屈さの根源は山手の仙人山を縄張りとする西洋人のグループが、中華街狩りを決

行した頃から始まつた。

中国系、朝鮮系、東南アジア系、それぞれのハーフ系のグループが次々に襲われて、次

は日本人のグループかとわくわくして待つてはいるのだが、今のところその気配はなく、

それどころか仙人山に襲われたコンジンやヨンホウのグループまでもが僕たちの前に姿を

現さなくなつてしまつた。

コンジンやヨンホウがやられたままでいる訳がなく、報復の作戦に忙しくて僕たちなど

相手にしている暇はないといったところだが、まったくをもつて静かである。そのお

かげで僕の周りには勉強以外の問題が何も起こらず、相変わらず穏やかでのんびりとした

日々が続いていたのだ。しかし、中華街に住んでいる僕の場合、穏やかな日々というのは

授業の退屈さを上回るほど毎日で身体によろしくないのだ。

今日は土曜日で授業は午前中で終わりだ。有難いことに次のチャイムが鳴れば帰れる

し、明日は待ちに待つた日曜日だ。誰もが一番わくわくする時間帯なのだが、出るのはあ

くびばかりである。

と、その時、たいへんな事を思い出してしまつた。僕はあくびをしながらにやりとし

た。土曜の午後とくれば、一時からでんすけ劇場がテレビで放映される。今日の帰りは道

草をくつてゐる暇はなくなつてしまつた。もたもたしてゐるとだんだ
劇場が終わつてしまふ。

「う。大変だ。早く帰らねば。」

放課後、相棒のケンが「でんすけ、でんすけ」と、歯ぎながら僕
のクラスにやつてき

た。どうやらケンも僕と同じことを考へていたようだ。同類である。
しかし、やつかина事が一つあつた。ケンもその事は氣になつて
いたようだ僕の前に来

るなり頭を搔きながら囁つた。

「Hフよお、今日でんすけじや、すつかつ忘れてたよ。ナビよお、
あのばかたちが

る……」

僕は即座に答えた。

「あんなばかたち構つてゐ暇ねじや、しかどじや、しかど」

「それもやうだな、あのばかたちと帰るとかへなことねえからな、
しかどしてとんびりする

るかあ

「その通り、ケンちやんこここれと聞ひこち、とさづり、とさづり・

・「

僕とケンはある連中との約束を聞かなかつたことで同意し、逃げるよつに学校を後にした。

ケンとは家の前で別れ、早々に昼食をすませた後は、事務所のソファーに座つてテレビ

にかぶりつき、でんすけのトレーデマークであるはげ頭、口の回りを黒く塗つたすっぽ

けた顔、腰にかけたタオルに全神経を集中してばか笑いをしていた。すると、一階から職人のささちゃんが降りてきた。

「なんだ、でんすけ、もう始まつてたのかあ・・・」

そう言いながら、ささちゃんはテーブル越しのソファーに腰をおろしタバコに火をつけ

た。

しばらくすると玄関の格子戸にちらつく人影が気になり始めた。
田をやると曇りガラス

に怪しげな姿が三つ張り付いたり離れたり、時には姿を消したりを繰り返していた。

「ちえつ！」と僕が舌打ちをすると、セセリちゃんが反応した。

「Hフ坊、どうかしたのかい？」

セセリちゃんは中腰になると玄関先を覗きこんだ。

「あら～いらっしゃ～・・・最近、静かだと思つたら、やつと来たねえ、これは興味ぶかい

ぞ！」

セセリちゃんはここのしながらソファーに腰を下ろした。

じゅやら久しづりの殴り込みらしい、僕は戦闘基地と化してゐるソファーの下に手を伸ば

してまさぐり、指先に触れたバットを引つ張りだして握つていた。

この瞬間、退屈病は吹

き飛び身体中の血が逆流し始めた。

「また始まるのかい、今日はどうするんだい？ 楽しみだねえ・・・

」

セセリちゃんは立ち上るとまた玄関先を覗きこんだ。

「今日は二、三人しかいなそうだねえ、早く行かないといなくなつちやつよ」

「いいんだよほつとけば、俺はでんすけ見てんだから」

「それじゃ、何でバットを握ってるんだよ。早く行きなよ！」

「うるせーんだよ……」

わわちゃんの気持ちも判らないではないが、今はそれどころではないのだ。でんすけを

最優先しなければ早く帰ってきた意味がなくなるではないか、一週間ぶりの楽しみをあん

な連中に壊されたくない。目線をすぐにテレビへ戻した。

「フウカ～～～フウカ～～～」

じぱりくすると、今度は僕の可愛こ名前を勝手に呼びはじめた。
じゅうじゅう今田は顔色作

戦のようである。仲間を装つておびき出かうとした。そんな子供だましの乗る僕では

ない。いつものことだが間抜けでしつこいやつりである。しかし、でんすけ劇場がクライ

マックスを迎えていた。僕は周りのいつさいを断ち切り努めてしか
とを決め込んでいた。

すると、玄関の引き戸が音もなくスーっと開いた。僕の左耳はその瞬間をと

られていた。ビーナスの声色作戦は失敗したと思つたのか、開けられた戸の隙間にむづやつ

頭を突つ込んでいるばかがいた。

「まつたく、しつかえやつりだな、ぶつ壇こいやる」

やう歎きながら僕はバットを握るとソファーから立ち上がつた。

「わいわい、わいわいちやー。」

背中からわざわざんの声援を受けながら裸足のまま玄関におりて、戸の隙間から出でてい

る黒くてでかい頭めがけてバットを振り上げたとたん、こよもつと顔を上げたのはコンジ

ンでもヨンホウでもなくコングであった。コングはバットを見上げると不思議そうな顔を

して言つた。

「まつたくよお、いねえのかと思つたらいんじやんかよお、何で先に帰つねやつのよお、

なんだよやのバット？ まさか俺を殴るやこ、これ以上殴られたら死んじやへじや・・・」

コングの第一声にはこつもの威勢のよやは感じられず、顔は薄汚

れて所々が血がにじん

でいた。

「なんだよ、コンジンかと思つたらコングかあ・・・凄い顔しますけど、どうかしましだか？」

コングの血にまみれた顔など見慣れてくるのだが、どうもいつもと様子が違う。普段で

あれば入るなと言つても黙つて家の中に飛び込んで来るコングなのが、今日に限つては

遠慮ぎみである。しかも、先ほどから格子戸に見え隠れしていた一人も動かないままだ。

コングがいる以上残りの一人はバッハとパンチョである。ひづやら、穏やかな日々も今

田までのようだ。

「じつしたんだよお、まつたくよお・・・」

玄関において引き戸を全開にした。田の前にはまさしく服が泥だらけでよれよれのコン

グ、バッハ、パンチョの姿があった。

「すいませんけどお、つちは病院じゃなしので……わよつなり……」

・

僕は戸を開めると何事もなかつたようにソファーに戻つていつた。

「うわっ!」テレビの画面にはしゃぼん玉石鹼のロマーシャルが流れていった。でんすけは

既に終わっていた。

「あのばかたちだつたよ、まったくよお、あのばかたちのお陰でで

んすけが終わつちまつたよ」

たよ

既に二ばかは玄関の中に立つていつた。

「だいたいお前らは何で玄関の前でうわうわしてんだよ。このばあか!」

そう怒鳴りながら三人の顔を次々に睨みつけてやつた。

「そんなこと言つたつて、汚ねえまま家に上がると、Hフのお母ちゃんが怒んじやんかよ

「お」

「コングは僕の母に氣でも使つてゐるのか、心にもなすことを言つ

と頭を垂れた。

「あーりーひー、喧嘩かい？ いつやあ話の内容によつてはライスチヨーニ個、いや、五個

になりそつだねえ」

「えつ、本当？・・・」ヒミツが口を揃えて言つと笑顔になつた。

だが、どうもいつもと様子が違う、気合が入りすぎである。確かにだぼだぼのズボンを

腰ではき、ぺったんこのランドセルを肩に掛けている姿はいつもと変わらないのだが、傷

だらけの顔に血を擦つた跡がこびりつき、乾かない血は今だに滲んで光つてゐるのだ。そ

れでも笑つてゐる僕を照れくさそう見ながらはにかんでいるのは、喧嘩慣れした彼らの凄

いところで、その姿からして上級の格闘のあとだといふことは今までの経験上すぐに理解

できる。しかも、彼らが真つ先に僕の家にきた理由も想像がついていた。

彼らは幼少の頃から僕とつるんでいて、今まで様々な人種のグループと戦ってきた幼な

じみだ。いわば子分のような存在であろう。

歳は一つ下なのだがこの三人は身体がでかい、角刈りのパンチョとくせ毛でくるくる頭

のバッハは僕やケンとひけをとらないし、コングなどは小太りのうえ僕らよりでかいの

だ。この二ばかは絶対にどこかでダブっているのではないかと疑いたくなるほどだ。そん

な彼らは気にくわない相手がいると、それが年上であるひとを容赦しないのだ。だから彼ら

が手を組むと年上でも手が出せなくなり、今まで何人もの年上が犠牲になつてゐる。その

たびに僕やケンが話しきつけて仲を取り持つて来たことを思うと涙が出るのだが、僕には

周辺の同学年の連中よりも頼りになる面白い二ばかトリオなのだ。

「Hフちやややん、どうしたの？」

奥の台所から母の声が飛んできた。僕は二ばかを気にしながら怒鳴り返した。

「お母ちやん。ここつらの前でHフちやんって呼ぶなつていつてんだろ！」

母は誰の前でも何処でも僕をちゃんと付けで呼ぶ。近頃それが照れくさく感じるよくなっていた。

「いいじゃないのお別に・・・そんなことよじどうかしたの？」
フちゃん

と、言いながら僕の気持ひなど理解しない母が、前が前掛けで手拭きながら近づいてきた。

「だからあ、エフちゃんって・・・まあいいや、お母ちゃんひとつここにつら見てみい」

僕は笑いながら手招きした。しかし、彼らを田の当たりにした母は意外と冷静でそれほど

ど驚いた様子はなく、血だらけの彼らを見て驚愕する母を想像していた僕にしてみれば期

待はずれそのものであった。

「あなたたちまた喧嘩したの？ そんなどこに立つてないで中に入りなさい」

と、母は彼らの顔を見て言つたが、服装に田をやりながら。

「ち、ちゅうとんのまま待つてなれ。ここまだ上がりないでよ・・・

・・・

そういう残して小走りで台所へ戻つて行つた。

三ばかは肩からランドセルを降りすとほつとした表情でぼーっとたたずんでいた。

僕はそんな彼らの哀れな姿をソファーに座つたままにたにたしながら眺めていた。

「なんだ、また、治療しに来ただけか、近いうちに喧嘩の話し聞かせてね・・・」

わわちゃんは三ばかに向かつて手を上げると残念そうに仕事場へ戻つて行つた。

母はいつものように濡れタオルを三本と救急箱をかかえて戻つて来るなり、彼らの顔か

ら腕、そして足にいたるまでを無言のまま拭き始めた。そして彼らを事務所にあげるなり

「ここに並びなさい」と指示して救急箱の中から消毒の粉と赤ちゃんを取り出して傷口に赤

ちんを塗り始め、傷が酷い部分には消毒粉を吹きかけた。

その度に三ばかは「痛つてえ、しみるう、かんべんしてくれえ」と叫びながらも嬉しそ

うであった。

母の手当では手馴れたものだ。僕は一人っ子だったのだが、仲間だけは大勢いた。不思

ではないだろうが面倒議と僕の周りに集まってきた。けして仲間をつくる才があったわけではない

見だけはよかつたらしい。仲間が怪我をすると必ず家へ連れていき母に手当てをさせてい

た。かすり傷程度ならいいが酷い状態で母の手にはおえず、そのまま病院へ直行すること

も度々あつた。しかも仲間の耳くそが溜まつてゐから取つてくれと連れてきたこともあつ

た。その度に母は目を丸くしていたのだが、慣れるところとは恐ろしいことだ。傷口も

まともに見れなかつた母が最近では状況判断も素早く、手馴れた看護士の如く変身していく

た。これも全て僕のお陰である。

母は手当てを済ませると、フーッとため息をついて二ばかを見渡しながら言った。

「三人ともけつこうやられたやつみたいね、どう、まだ痛い？」

母は三人の田を順番に覗きこんだ。それが照れくさかったのか。

「痛かねえよ、ちきしょつ、あいつら覚えておけよお！」

この三人の中でも一番気の強いバッハがテンパーを振り乱しながら強がって見せた。

「だいたいよお、お前えら誰とやつてきたんだあ、コソホウたちかあ、それともコンジン

たちかあ」

そう言つて僕が三ばかを見渡すと、母が振り返つて言つた。

「そんなことどいつもいいでしょ、あなたは余計なこと聞かないの」

「どつちでもねえよ

「あいつらは最近、俺たちの前に姿見せねえし・・・」

コングとパンチョがそう言つて僕の顔を恨めしそうに見ると、バッハが意味ありげに赤

く充血した片田でじろりと田線を送ってきた。その瞬間、僕の脳裏は仙人山のグループを

捕らえていた。

「お前ら仙人山へ行つたのか？・・・」

「やめひてんじゅ」

バッハが力強く答えた。

「そうなのか？」と、コングとパンチョに確認すると、一人は黙つて頷いた。

「あいつら、どういう來たかあ・・・だから、俺とケンガいない時は仙人山は通るなつて

言つてたろ、今はとくに危ねえから、そのいつか狩られぬつて言つた
じゃねえか」

「そんなこと言つたつて、今田の朝Hフに言つたじゅんかよお、今
田は土曜だから一緒に

帰れりつて

「やうだよ、エフだつて返事したじゅ、それによお、俺たちはあん
なやつらに狩られやし

ねえよ、今日だつて負けて逃げてきたわけじゅねえし

確かにコングとパンチョの言つ通りである。僕はしつかりと約束をしていた。しかしで

んすけ劇場の誘惑に負けて何が悪い。どう考えたつてこんな時にこんな喧嘩早い連中とい

るよりでんすけの方が面白いに決まつてこゐるのだ。

「そんな返事したっけえ、え、え、え」

おもいつきりすつとぼけてやつた。

「したじや、だからエフの教室に行つたらいねえじや、だからしょ
うがねえから・・・そ

したらのんきにでんすけ見てんじや・・・・・・

「コングの演説はだんだん尻つぼみになつていつた。僕はすかさず
話を切り替えようと喧

嘩になつた経緯を彼らに振つた。すると単細胞のコングがボソボソ
と話し始めた。

「エフもケンもいねえし、しうがねえから三人で仙人山歩いてた
らさあ、外人ハウスの

庭の奥から俺たちと同じ歳の連中が三人現れて、俺たちに向かつて
卑怯もの、卑怯ものつ

て訳わからんねえこと言いやがつたから、俺たちも負けずに言い返して
いたんだけど、バッ

ハが走りだして一人に飛び掛つて行つたから、俺とパンチョも残り
の一人をランドセルで

ぶつたたいて、ぶん殴つて引きずり倒してさあ・・・・・・

彼らはちゅうとのことでも大げに驚く母の反応を楽しむよつて話している。バッハが

母の顔を見ながら得意げで続けた。

「やしたらよお、あいつらも抵抗してきたからまじめにこいつた
よおー。」

パンチ戸も鼻をすすりながら胸を張つて言つた。

「俺なんかさあ、笛で頭をひっぱだしてやつたよ

まつたく恩みじこ連中である。ビハヤー一緒に帰りなかつたのは
正解であつた。

「そんでもよお、何が卑怯ものだつて聞いたらさあ・・・・・・」

そう言つてバッハがにやりと僕を見ながら黙りこんだ。すると、
今までふんふんと櫛を

かに話しき聞いていた母の顔色がみるみるうちに変わりだしてしま
つた。

「あなたたち、ぶん殴つて引きあつたおじいちゃんはいわんこ
ことなの? 箕やラン

ドセルは人を殴る道具じゃないのよ、ビハヤーそんな恩みじことい
ばかりするの、ダメで

しょー。」

「そんなこと言つたって、エフなんかもつと怖えことすんじやー。」

「ばあか、余計なこと言つんじやねえよー。」

僕はまずいとばかりに、ソファーから飛びあがると、コングの頭をおもにつきりはたい

た。

母は大きくため息をついたあと「何が卑怯者なの?」と、三人の顔をゆっくりと覗きこ

んだ。三ばかは氣まぎれつに合図のような目線を僕に送った。彼らにしてみれば母にその

理由を話す前に、僕に氣づいてもらいたかったのだ。僕が氣づけば話しき「まさしく

とができると氣を使つてくれたのだ。だが、そんなことは気にもとめずにはらに追いつか

をかけてしまった。

「黙つてねえで、何が卑怯者なのかさつとか言えよ。このばあか!」

すると、パンチョが鼻の穴をピクピクさせながら「エフウーほんとに黙つていいいのかよ

お」と、下田使いでズルズルズルつと鼻水を飲み込みやがった。

「汚つたねえなあ、いいにきまつてんじや、早く言へよ」

そんなものを見せられてはやつ答へるしかなかつた。

「すいぶん前のことで、俺たちはもういなかつたから、よくわかんないけど・・・」

「ソングはモジモジしながら今まで黙つて黙つこんだ。すると、バッハが母の田を氣に

しながら齒くちづけ言つた。

「そん時にわあ、雪の中にでかい石を入れて・・・ぶつけたとかなんとか、言つてたつ

け・・・」

「雪い？ 石い？ 何じやそれ？」

僕はすつとこきょうな声を出しながらもしつかいつて雪に出していた。

「雪の中に石を入れてぶつけたって、誰がそんなことしたの？」

母の叫びにも似た声につられてバッハがとんでもないことを見つめた。

「Hフが・・・」

「Hフちゅあんがやつたの？」

母は面食らつてバッハの肩を揺すつた。

「あ、いや、ケンだっけ？」

と、バッハはとぼけたが後のまつりだった。母は顔だけを僕に向け心外なことを言つた。

た。

「やつぱり、あなたが絡んでいたのね」

「ちがう、ちがう、俺がやつたんじゃねえよ」

僕はそう言いながらあわてて手の平を左右に振つたが、母は疑い深そうなまなざしを僕

に向けたまま「じゃあ、誰がやつたの？ 言いなさい！」と叫んだ。当然、正直に答える

僕ではない。知らないやつがやつたと言つて張つたが、母のしつこい追及に交換条件をだす

べく、この話しさはライスチヨコ五個分に相当する。と、口まで出かかつたがその気持ちを

ぐっと抑えながら話し始めた。

何ヶ月も前にさかのぼるが、横浜には珍しく雪が降り積もった日があつた。

その雪は夜半から明け方まで降り続いたのだが、翌日の下校になると空はすっかり晴

れわたり、どうも期待にはそえない雪であった。

しかし、雪合戦ができる程度の雪は残っていたこともあり、僕は同学年の仲間たち数人

と、晴れわたった空を残念な気持ちで見つめながら校門をあとにした。

その日は校門の目の前に口を開けている代官坂トンネルは抜けずに、右側の坂道を山手

通りに向かつて登り始めた。

山手通りを渡つて代官坂を下り、クリフサイド側になるトンネル出口付近上の広場にさ

しかかるうとしていたその時、広場の奥から雪玉が数個飛んできて、僕たちの足元でバサ

ツバサツと碎け散つた。

んつ？・・・僕たちは一齊に雪が飛んできた岐路場の奥に田をやつた。どうやら広場の

奥でアメリカンスクールの連中が雪合戦をしていました。

しかし、僕たちに飛んできた雪玉は単なる流れ玉ではなく、その中に混じっていた仙人

山のグループの一、三人が僕たちに向かって投げていたようであった。

「ちっさしょう・・・エフ、ブースカじやねえか、やつちまうか？」

ケンが声を荒げた。

「あつたりめえじや、せつちまおつ」

僕たちは積もっている雪をつかむと、固めながら彼らに近づき一気に投げつけた。その

うちお互いの人数も増えだし、攻防戦はエスカレートしていった。

しかし、不思議なことに気づいた。いつもであれば、一部の仙人山の連中と喧嘩にな

つていてはすなのに、この日ばかりは珍しい雪に興奮していたのか、お互いが雪合戦に集中

中し純粋に楽しんでいたようであった。しかし、それもここまでであった。

「エフ！・・・」と、呼ぶ声に僕は振り返った。そこに立っていた

のは - 学年上のつまわ

たちであつた。

「H-H、面出せないから」とやめていた感じで、「俺たちがやつてやるよ」

「こえ、結構です」とも言えず、むりやつりヨウたちも参戦することになった。

僕の脳裏には、安心感と嫌な予感が複雑に絡み合っていた。そして、五分もたたない

ちにそれは起こつた。

「エフ、お前えこれ入れてんのか？」

リョウは手の平に乗つてゐる二三大の石を見せつけた。

そんな恐ろしいもの僕が入れるわけないじゃないですか、
たかつたが「入れてね

えよ」と言葉を止め握った雪を眺めていた。するとコヨウは傷つくことを平氣で言った。

「何を入れねえんだよ、いつもだつたらレンガでも入れかねないお前が珍しいじや」

確かにリョウの言う通りである。頭にくると握った雪の中にでかい石を入れてぶつけて

やる」とぐらりと当たり前のことがなのだが、どうもこの口は相手に対する感情が違っていた

みつだ。しかし、リョウにそんなあまぢやんな」とは言えない。

「あいつらも入れてこねえからな」と、呟くよつて言った。

「ばあか、お前えらしくもなこと言つてさじやねえよ。やられると前にせんだよ、めんどくせえからよお、」それでどビメ刺してやりつけた。

リョウはそのまま言つて、石の入った雪玉を投げ続けた。しかし、妙なことを感じた。

リョウは一人だけに集中攻撃をしてくるように見えた。そのうちリョウが狙っていた少年は首を押さえながら崩れ落ちていった。

「やつと、命中しゃががつた、さああみる。ハフ、逃げござー。」

リョウの行動がよく理解できなかつた。どうして僕たちよつも一、二歳下であるおつおとなしあうな少年を狙つた

のであるつか、どうであれこのやつな場合は一緒にすることをやめる限り。僕たちもあわて

てその広場から逃げ出し、代官坂を滑るよつに逃げ降りていった。

母に話した内容は実際とは違つていた。あくまで主犯格で知名度の高いリョウの名前を

出すことは、母の精神衛生上好ましくないし、小言が長くなる可能性があるため知らない

やつで通しておいた。とにかくこの場をしのぐにはこれが万全の策だと考えたのだ。

話し終わるのを見計らつて母が言った。

「どうして、あなたたちは外人の子供たちを田の仇にするの？ 少しは仲良くなきない

の？」

「でもねえよ。あいつら生意氣だから・・・

そう言つてコングは足の傷を撫でながらジロッと母を見た。

「・・・・・・それでちゃんと謝つたの？」

僕は聞こえないふりをしていた。都合が悪いときはこれに限る。

「まあか、謝らないで逃げて来たんじゃないでしょうか？」

母は硬直した顔で僕を見ている。聞こえないふり作戦は失敗のようだ。しょうがないの

でとくいげに答えておいた。

「そんなの、あつたりめえじゃー！」

「な、なにがあたりまえなお、謝るのがあたりまえでしょ。だいたいあなたたちは毎日

なにをしているのよ、そんなことばかりしていいで、少しば勉強もしなさい！ ああ恐

ろじこ・・・

母は僕の頭に続き三ばかの頭もはたいた。だが、パンチョが鼻くそをほじりながら懲り

ずに言い返した。

「やんなこと言つたつて、恐ろしかったのは俺たちじゃ、そのあとにさあ・・・」

「そのあとって、まだ何があるのよ？」

母は嫌そうな顔をしてパンチョを見つめた。

「実はさあ・・・そのあとさあ、Hフと同じ歳のサンダーバードが

三人来やがつてさあ、

今度はそいつと喧嘩になつてさあ、そのうち人数がどんどん増えてきたから、さすがの俺

たちもやべえと思って、逃げてきたんだけど。おばちゃんさあ、俺たちもいろいろと大変

なんだよ」

・・・・・・・・・・母、目を丸くして沈黙。

あとから現れた連中の察しあつていたが、念のため三ばかに問い合わせてみた。

「あとから現れた三人つてどんなやつだあ？」

「コングが判りきつている」と聞くな、そんな顔で答えた。

「やつぱりな、ってことはブースカもいたつことだよなあ・・・・・

」

ブースカとトッポジージョは当時人気のあった子供向け番組のキャラクターである。ト

ッポジージョはねづみで、ブースカは間抜けな弱い怪獣だ。なかなか可愛いキャラクター

なのだが、仙人山の二人は可愛いない。どっちにしてもこの二人も中華街狩りに参加して

いたに違いないのだ。僕は少しの間、仙人山をじつ料理してやろうかと考えていた。

三ばかは今日の報復こうふくをして、逆に狩つてやりたくてしうがないのだ。僕の出

方をそつと伺つていい。彼らにしてみたら母のまえ僕に仕返しき委ねることはできな

い。三ばかはなるべく早く意思を示してやらなければならぬ。

「よし、これだけやられたんじゃ、黙つちやいられねえからな。俺がやつてやるよ」

「待つてました。やすがエフじやー！」

三ばかは田を輝かせた。それと同時に田を疊りらせた母は、びっくりした様子で僕に振り

返つた。

「あなたはなんてこといつの、あいた口が塞がらないでしょ。そんなことは絶対にやめて

よ、あなたたちも判つた？」

母は三ばかに田線を移すと、タオルと救急箱を抱えて台所に戻つて行つた。その隙をつ

いて僕と二三ばかりは外へ飛び出して行つた。

「お前らよお、俺はケンの家へ行つてくるから、めし喰つたりあの路地裏に集まれよ」

三ばかに言つと三人は嬉しそうに領き三本の路地へ散つて行つた。
仙人山の連中が日本のグループに手を出した以上このままにしておくわけにはいかない

のだ。仕返しを速やかに遂行するには、今まで中華街の路地裏を一緒に戦い続け、日本人

のグループを引っ張つてきたケンの力が重要になつてくるのだ。

ケンは、短気と冷静を持ち合わせた静かな少年である。しかし、僕といふ時は違つてい

た。確かに僕よりは冷静なのだが、怒らすと口には歯、歯には歯、いや、棒には鉄パイ

ブ、レンガにはブロックといったお茶目などもあり、相手が年上であろうが平氣で向

かつていくし、仲間がやられたりすると直ぐにやり返しに行つたりする頼もしいやつだ。

さつそくケンの家に行くとケンは「ヤーヤーしながら店の奥にある畠部屋に立っていた。僕

はケンに田配せをして顎を振ると、台南小路の路地裏へ向かった。

* *

*

僕たちのグループと仙人山との因縁は通学路の途中で、あの危険な近道を見つけ出した

頃から始まつた。

通つていた小学校は元町商店街から代官坂を登り、代官坂トンネルを抜けた正面、いわ

ゆる山手の丘の上に建ち、そのコースが学校指定の通学路になつていた。しかし学校指定

の通学路なんてクソくらえの僕たちである、学校までの近道を見つけて出してからは頻繁に

利用するようになつっていた。

その近道は中華街南門から前田橋を渡つて元町商店街の裏通りまで直進すると、現在は

その位置にはレストラン霧笛楼と右隣に立体駐車場が建ち並んでいるのだが、ちょうど立

立体駐車場の裏側が近道の始まりだった。

当時、立体駐車場は資材置場的な空き地で、その奥には小高い丘が左右に連なり、正面

には高さ一十m、幅十五mほどの崖がいかつい顔を出していた。崖は傾斜がきつく危険な

崖で現在その崖は草や木に覆われて残念ながら田にすることはできないが、僕らにしてみ

れば絶好の遊び場であった。この崖を三分の一ほど上ると直系一m、奥行き三mほどの洞

窟があつたのだが、この丘には防空壕の名残といえる洞窟が幾つか存在していたのだ。

僕らはこの洞窟の中に入つたり、入口の前に横一列に並んでは目の前に広がる横は目の

風景を眺めていた。

ある日、樹木が生い茂った頂上にふと目をとめて登つてみると、目の前には狭いジャン

グルのような密林が現れ、密林を奥へ進むとそこは見慣れた外人ハウスの裏側であった。

そして庭を囲っているフェンス沿いの十mほど先には仙人山の通りが顔を出していた。

この通りを右折して山手通りを目指せば小学校は目と鼻の先であった。山手通りにでる

と右側には汐汲坂が元町商店街へと下り、下り口の横にはフェリスの中、高等部が建つて

いる。そしてその正面には小学校の校門へ続く下り坂が姿を現すのだ。

僕らは山手通りまで続くこの通りの両側一帯を仙人山と呼び、頻繁に往来を繰り返す、う

ち仙人山のグループに遭遇しあじめ、もう一人変わった人物と知り合つことになるのだ。

現在、正式名称は高田坂と呼ばれるこの通りには百段公園があり、通りの両側は住宅で

埋まっているのだが、当時は外人ハウスが主で通りをはさんだ左側一帯には三mほどのフ

ェンスが通り沿いに張られ、フェンスの向こう側には外人ハウスの庭園が広がり、二階建

てのハウスが一、三軒あるだけだった。そして右側一帯には縁鮮やかな芝生の庭が広がる

平屋造りのハウスが規則正しく並び、高さ一mほどのフェンスが庭を区切るように張られ

ていた。当然の如くこの仙人山一帯から山手通りには外人さんたちが多く住んでいたのだ

が、仙人山のグループはこの周辺を縄張りにしていたのだ。

僕らは西洋的な顔をした人は皆アメリカ人だと思っていたが、実際はどちらのお国柄な

のかは定かではなかった。しかも仙人山のグループは仙人山に住んでいたわけではなく、

何処から集まるのかは謎であった。そして、僕らは彼らを仙人山、もしくはサンダーバー

ドと呼んでいた。サンダーバードは当時の人気番組、テレビ人形劇のタイトルだが、出で

くるキャラクターが全て西洋人だったからそう呼んでいたのである。彼らは日本語を流

暢にしゃべりはしたが、微妙に違う発音や語尾が僕らには爛にさわり、山手周辺で彼らと

遭遇すると必ず喧嘩になつた。これといって仲が悪くなつた直接的原因など見当たらず、

他のグループと同様に双方の心の奥に渦巻いていた人種的蟠りと、プライドの主張がぶつ

かりあつたのだろう。どうであれ彼らと僕らの対立はこの仙人山から始まり、今もなお続いていたのだ。

第一章 休戦宣言

「休戦宣言」

市場通りと香港路を結ぶ台南小路には一軒だけ駄菓子屋があり、横の路地裏が日本人ぐ

ループの溜まり場であつた。この路地裏には日本人のほかにも様々な人種のフリーの連中

も顔を出すことがあり、何か問題が発生すると常時十人以上のメンバーが地べたに座り込んでは会議を開いていた。

「そつかあ・・・・・あのばかたちとつとうやられたかあ・・・・・
今日よお、俺たちが

とんずらしたのがまずかつたのかなあ・・・・・」

ケンは気まずそうに顔を歪めて唇をかんだ。ケンは心を許した相手には優しい男である。笑っている僕とは大違ひだ。

「気にするなって、あれだけ仙人山には行くなつて言つてたのによ

お、そんなこと気にも

してねえんだからよお、ばちが切たつたんだよ、ばちが・・・ケン
よお、仙人山のやつり
りつり

今度は日本人狩りでも始めよつとしてんじゃねえのか?」

僕は冗談半分で言つたのだが、

「Hフもやう思うか、俺もよお、そろそろ来るんじゃねえかなつて
思つていたんだよな、

けどよお、あこひらもじつさへよな、あれから向ヶ日経つてゐと思
つてんだか、今更雪合

戦でもねえだらけ。それによお、だいたいあれはリョウがやつたん
じゃんかなあ

「けどよお、ケン。三ばかが言ひこな、あいつらは俺らがやつたつ
て決め付けているみた

「だからよお、このまませつとく訳いかねえじや

「・・・・・・・・・・そうかあー。」

ケンは少しの沈黙のあと何かに気がついたように声を上げた。

「何だよ、びっくりさんじや

「Hフ、もしかしたらよお、仙人山のやつり、リョウがやつたつて

こと気づいてんじゃね

えのか？」

「それだったら、めんどくせえ」としねえで、リョウに直接言えばいいじゃねえか

「そ、うだよなあ、つといつてもあいつらにそれはむりかあ」

・・・・・ そうかあ！」

「なんだよ、エフ。びっくりすんじゃ」

「あいづりみお、俺たちがリョウと一緒にここの見てるから、リョウが俺たちのあた

まだ思つてんじゃねえのか?」

「あたまつていえばあたまだけどなあ、でもなあ、リョウは一匹狼だからな」

「あこついもんな」と判つちゃねえから、下から順番にひいて」とだ

「エフよお、今までのじと考えりや、俺たちが狙われるのは判るけどよお、あいつら向で

中華街狩り始めたのかなあ、しかも襲われたのは俺たちとための連中とその下ばかりじ

や、やつぱり雪の日のことが絡んでんのかなあ?」「

「それは関係ねえんじゃねえの、あいつらよく中華街におひできては誰かしらにやられて

たじや、だから逆襲いでたんじゃねえか」

「けどよお、エフ。仙人山のやつらがウマで獨りと悪つか?」

「むつむつ、反対に殺されんぞ」

「そりだよな、けどなあ、トップジャー・ジョやブースカのバックには俺たちより上がかなり

いるしな」

「一〇上の黄金バットたちか?」

「ん・・・・・あいつらはそれほど怖くねえけど、一一〇のジリーとジョンがでてくると

やつかいだよな、その後ろには大魔神も控えてるじよお・・・」

「デビーか? あいつはさう簡単にはでてこねえよ。今までだつて姿すら見たことねえじゃ」

「けどよお、リョウをやるとなつたらでてくんだろ? もじ、リョウがやられたりしたら

中華街の四天王が黙つちゃねえぞ。あの、怖い怖い四人が動いたら

全面戦争だな

ケンは身震いしながら一ターッと笑った。本当に怖こと思つていいんだが、楽しんでんだかより判らんやつだ。

「ケン。そんなことどうでもこいじや、それよりよお、その前に関係ねえ三ばかに手をだ

した仙人山をどいつ料理してやるかだよなあ」

「やうだよなあ、このままやられっぱなしじやなあ

ケンは口ひるを拾つて前の家の壁に投げつけた。すると、小窓がすっと開き、口ひるが

い中国人おばさんが怒鳴つた。

「石……ダメで……しょ……」

こつもの」とである。僕とケンはとほけていた。すると……

「わか……たああ……」と、四角い顔を小窓から出した。僕とケンは立ち上がり、その

四角い顔に近づくとしつかり挨拶をした。

「へりせえんだよ。へりぱぱああ

「へへ、ばば、だれ？」

おばさんは細い皿を吊り上げた。

「おめえだよ・・・」

「わうだよ、うるせえんだよ」

僕とケンが頭上になる小窓に背伸びをしたままひつ怒鳴り返すと、おばさんはでかい顔

をひつこめ窓をピタッと閉めた。僕とケンは元の位置に戻り座りなおした。

「まつたく、毎度、うるせえばあだよ。なんで中国人って早口で怒鳴つてばかりいるん

だろうな、エフ」

「また、太鼓のバチ持つて出てきたりしてな」

僕は、クツ、クツ、クツと笑った。

「エフ、話しが判らなくなつちまつたよ。なんだっけ?」

そう言われてもケンに判らない」とは僕にも判らない。考えていた・・・

「さうそつ、だからよお、早い話し仙人山をやつちまおつてことだよ

僕はケンの横顔を覗き込んだ。ケンがすぐに乗つてくれることは判つていた。今回は三ば

かがからんでいる、僕とて今まで何度もケンに助けられている。ケンが動かない訳がないのだ。

「そうだな、エフがやんだつたら俺もやるからよお、日本人狩りされる前にアメリカに奇

襲しかけるか

ケンはそう言つて一回頷きながら同意した。

「けどよお、エフ。あいつら今日はトッポジージョたちもいれて六人いたんだよなあ。口

ンジンやヨンホウがやられた時は十人以上いたらしいしょお、俺たちより上の連中がころ

「こういたみてえだから、俺たちのほかにも何人か連れていいくかあ?」

ケンは僕の顔を覗き込むと太めの眉を顰めた。しかし、僕は三ばかとケンを含めた五人

にこだわりを持つていた。この頃この近辺には同学年の日本人が比較的少なかつたため、

中途半端でとんびりしあつた同学年よりも、どう見ても年下には見えない三ばかのまづが

よっぽど安心であったに違いない。

「五人いれば何とかなるって、むこうの人数が増えたらそんときはそんときじや、俺たち

が動いたって大魔神やジミーとジョンまで出でこやしねえから」

「Hフは相変わらず三ばかを買つてゐよなあ

「せうじやねえよ、俺が頼りにしているのはケンだよ。こぞとなつたらよお、ケンが一人

で三人やつちまえばいいんだからよお、五人でどうこなるつて

僕はのんきに言つてケンの肩を叩いた。

「そうだな・・・・・えつ？ 僕が一人で三人やんのかよお、俺はエフがいるからやん

だからよお、まあこいや、そんときはそんときだな

ケンものんきに笑つた。そのうちパンチヨ、コング、バッハの順で集まりだした。彼ら

は僕とケンの前で胡坐をかいた。

そして、会議は始まった。結局、氣があさまらない三ばかの意見

を考慮して、なるべく

早く行動を起こうと、いつとでもとまつ、報復の決行日は明日の日曜に決まった。

「ハフ、もしよお、仙人山にサンダーバードがいなかつたらどうする？」

ケンがいい質問をした。

「そうだよなあ、あいつら仙人山に住んでるわけじゃねえもんあ、それに何処に住んで

んのかよくわからんねえしな」

「家でもわかれば乗り込んで一人づつやつてやんだけどなあ

ケンは恐ろしいことを言つた。

確かにあの仙人山グループはあの一帯を縄張りにしてはいたが、何処から集まつてくる

のかは謎であった。だから必ず仙人山にいるとは限らない、しかも今回の仕返しは五人で

決行する。簡単に終わらせることはなるべく早く見つけ出し、トップジージョたちを集中攻

撃したい。山の手周辺を長い時間うろついていると僕らより上の連中が集まる危険性があ

る。そんなところに突っ込んで行つては勝てる喧嘩にも勝てず、それこそ袋たたきあつ危

険性大である。僕は噛み切つた爪を普つと吹き出した。

「けどよお、よく考えてみい、明日は日曜じやんか、もし仙人山にいなくてもあそこに必ずこりるって・・・」

僕は全員の顔を見渡した。

「そつだな、元町公園か港の見える丘公園、もしくはフランス山・・・」

ケンは直ぐにピンときて二ばかを見渡した。

トップポジージョたちの行動範囲はだいたい決まつてゐる。日曜ともなればケンが言った

ようすに外人墓地周辺にいるはずだ。その中でも一番確率が高いのは元町公園だらうと僕は

読んでいた。

と、その時だつた。台南小路からやつかいなやつが走つてきた。
突然現れては何処にで

もついて來たがる一年のカズキである。

「おい、明日の」とはカズキには言つなんよ」

僕は即座に全員を見渡して口止めした。どこにでもついて来たがる力ズキなのだが、明

田は連れていくことは出来ない。僕なりに考慮したつもりだ。カズキはいつものように

「二二二しながら近づいて来た。

「やつぱりここにいたのかあ、探しちゃつたよ。エフの家に行つたらいいないし、パンチョ

「……？」

カズキは息を切らせながらそう言つと三ばかの後ろにしゃがみこんだ。

「だいたい、なにしに来たんだよお、お前えは？」

振り返りざまコングがカズキの頭をはいた。

「にしに来たつていいじゃんか」

カズキは頭を撫ぜながらぼそぼそコングに言い返した。すると、パンチョがカズキの頭

を取り、「相変わらず生意気だな、よかねえんだよ」と言いながらへ

ツドロッグを食らわせた。

「エフ、なに話してたのよお」

カズキはヘッドロックをされたまま僕の顔を見た。パンチョがヘッドロックを解くとバ

ツハが「なんでもねええよ」とカズキの頭をはたいた。それでもカズキは僕にこりと

しながら食らい付いてきた。僕はカズキにこりとされると何故だかこまつてしまふ。そ

れを察してケンが助け舟をだしてくれた。

「風呂でも行くかって話してたんだよなあ、エフ」

「そ、う、風呂な、風呂」

僕はケンの助け舟に乗つたつもりだったが、カズキの疑い深そうな顔はそのままだ。す

ると、パンチョが突然、当時の日本全国の子供たちが一度は口にした殺し文句。

「あたり前田のクラッカー……だつづの、なあエフ」とつまらないことを言った。

「つまらねえ」と呟てんじゃねえよ、」のばあか

ケンが笑いながらパンチヨの頭をはたくと、カズキは「コーコー
たが、その顔が一瞬に

変わり立ち上がったと思いきや「あつー　あああ」叫び、台南
小路方面を指で差しな

がら後ずさりを始めた。僕はカズキが指差す方向にしゃがんだまま
目をやつた。

すると、十ほど先になる路地裏の入口に頭を包帯でぐるぐる巻
きにしたお方と、顔じ

ゅうが赤ちゃんと絆創膏だけのお方がこっちを見据えながら立つて
いた。

それを田にした三ばかは即座に立ち上がり路地の奥へとゅっくり
歩きだした。けして逃

げていった訳ではない。彼らの戦う本能である。こつものことだか
ら目的は判つている。

僕らのいる位置から十ほど奥に行くと、コンクリート製で木蓋
の付いたゴミ箱が設置

してある。その裏には武器が隠してある。三ばかはその裏から鉄バ
イブを五本取り出すと、

引きずりながら戻つて来た。

ケンは僕に視線を送りながら「なんだ、あいつら?」と顎を振った。僕も不気味な一

人を見ながら考えていた。

「ん・・・どう見てもヨンホウ君とコンジン君だよな・・・それにしてもなんだよな、

あの包帯と顔は・・・

「あいつら仙人山にそいつをやられたみたいだからなあ、それにしてもあれは大げさだよ

な、けどよおエフ、なんであのばかたちが一緒にいるんだよ」

ケンは不思議そうに一人を見据えていた。確かにケンの言つ通りだ。あの二人は敵対し

あつてゐる中国系と朝鮮系親分である。その二人が一緒にいる」と事態が初めて見る光景

であり信じがたいことなのだ。後ろからバッハが声を上げた。

「エフ、あれやつぱしコンジンとヨンホウじゃ、ちゅうどいいからやつちまおうよ、俺た

ちに行かせてよ

三ばかは鉄パイプを杖にしながらぞろぞろと立ち上がった。

「ばあか、あわてんじゃねえよ。なんかおかしいよな、あいつら手ぶらだしょお、なあ

ケン」

「それもやうだよなあ、いつもだつたらとつぐに殴りこんでくるはずだしな、なんか企んでんじゃねえのか

「まあいいや、あいつらも動かねえから様子をみつか、君たちも下品なこと言つてないで、

そんな恐ろしい棒は下に置いて座つて座つて……

僕はそう言いながら二人を座らせた。

「Hフケン、そんなにのんびりしてて大丈夫かよ、あいつら協定を結んだのかもしねえ

し

「せうだよ、台南小路に三十人ぐらい隠れてるかもしねえし

「つて」とは、逃げるか、じつから行くかのじつちかじや

三ばかはノータリンなことを口々に言つたが、一理ある意見であった。

「ばあか、協定協定つて、あいつらが本当に組むと思つてんのか？
なあ工フ」

ケンは笑いながら僕を見た。

「その通り、ケンちゃんの言つ通り」と、僕も笑いながら二ばかを見渡した。

その時、コンジンとヨンホウが動きだした。そして、神妙な面持ちで近づいて来た。

どうであれこの一人が現れるところがない。ちょっとでも心を許そるものなら隠

し持つた武器で頭をかち割られることもある。ことが起こればカズキは足手まといである。

「カズキ！ ゴミ箱の裏に隠れてる！」

僕がそう怒鳴ると「ん、うん」と素直に頷き路地の奥へ走つて行つた。それを見定めて

ケンは二ばかとカズキに声をかけた。

「お前らよお、路地の奥も見てろ。カズキイ！ そっちから誰か来たら教えろお！」

そして、コンジンとヨンホウは僕らの前で足を止め、ヨンホウが口火を切つた。

「お前らよお、そんなに警戒すんなって、お前らよお、その鉄パイ
プなんだよ……」

警戒してるのはお前らではないか、一人は二ばかをしきりと氣に
していた。

「おー一人お揃いで珍しいじゃ、なんか文句あんのかー。」

僕は座つたままそつ怒鳴ると、上目遣いで一人を睨みつけた。

「ハフ・・・そんな怖い顔すんなよ」

コンジンが落ち着いた口調で言つた。

「お前らよお、なにしに来たのかしらねえけど、袋にそれたくなか
つたら、せつれと帰つ

たほうがいいよ」

ケンも座つたまま一人を威嚇した。すると

「ばーか、誰がお前らの袋になるつてえ、ふざけた」と言つた、こ
のやうつー。」

ヨンホウが怒鳴り返した。

「面白こと言つじや・・・」と、僕が立ち上がりつとした瞬間、
バッハとコングが後ろ

から飛び出し、一人の胸ぐらつかみかかつた。しかし、いつもの

一人であれば胸ぐらを

そう簡単につかまつたりしない。その前にパンチが飛んでくるはずだ。二人は微動だにし

ない。どうも様子がおかしい。僕はケンに視線を送ると首を傾げた。するとケンも首を傾

げながら言った。

「コング、バッハ、手を離してやれ。ここから今田は喧嘩に来てねえよ」

ケンがそう言つとコングとバッハはぶつぶつ言いながらも手を離し、僕らの後ろにしゃがみこんだ。

「まったくお前ら二人は威勢がいいし、容赦ねえな。俺の子分にしてえよ、ナビよお、ボ

ンを子分にするせじ俺は落りぶれてねえからな」

相変わらず口が悪いコンホウの言葉に切れたのかケンがすっと立ち上がり。

「お前え、それ、どうこいつ意味だ。じりあー」と、怒鳴つた。その瞬間、僕は立ち上がり

コンホウの股間を蹴り上げていた。コンホウは股間を押さえて膝を

付くと、「コンジンが僕

を制止ながらヨンホウをかばって居る。はじめて見る光景だ。

「お前らよお、結局、嫌味言つにきたのか？」いやひつー。

僕は怒鳴つた。

「エフ、落ち着けつて、ケンが言つた通り、今日は喧嘩しこきたんじゃねえんだからよお、お

ヨンホウ、いいかげんにしとけよお、これじや、話しなくならねえからよお、今日は俺も我

慢すつから、お前も我慢しきつて

今度はコンジンがヨンホウをなだめて居る、ビックリした。

「判つたよ、コンジン悪かつたな」と、ヨンホウは悔しさを隠し切れずも素直に頷いてい

た。まつたくこの二人は頭がおかしくなったようだ。僕はあきれ返つたままケンと座りなおした。すると、一人はすばやく僕らの前に胡坐をかいた。

「エフよお、お前に蹴りくらつたの久ぶりだな、効いたよ

ヨンホウは股間を押されながら調子いことを語つて笑つと笑つた。この二人が去世

「お前らよお、なに企んでんだ？ だいたい、お前らが何で一緒に辞を言つてまで俺らに何を聞きたいのだらうかと僕は思った。

「お前らよお、なに企んでんだ？ だいたい、お前らが何で一緒に俺のところへ来るんだ

よ。俺らはお前たちに話しなんかねえよ」

僕は一人を睨みつけた。

「お前らよお、俺たちに勝てねえから協定でも組んだのか、どうかござるぞう仲間が隠れ

てんじやねえのか？」

ケンが疑い深そうな顔で嫌味っぽく言つて、ヨンホウは凝りもせずにがぶりを振った。

「ばーか、ふざけたこと言つてんじやねえよ。お前らなんか協定なんか組まなくとも、いつ

だつて潰すことほどできんだからよ」

ヨンホウとそりが合つやつなどいないのだが、普段からケンとヨンホウはどいつもそりが

合わない、言葉ひとつで殴りあつのだ。僕はケンの肩に手を置いてケンを制止ながら言つた。

「潰してくれよ・・・」

一瞬、血生臭い風が吹いたが、コンジンがでかい顔をヒクヒクさせながら言った。

「今日は本当に話をしに来ただけだからよお」

「そりやつて油断させとこてこつもみたに一氣に奇襲しかけるんじゃねえのか！」

後ろからパンチョが怒鳴った。ヨンホウは機嫌を直したのか、三ばかを見上げながらボ

ーズ頭に巻かれているずつ下がりそうな包帯を押さえながら叫んだ。

「まつたく疑いぶけえなあ、本当に今日は一人しかいねえからよお

今までのことを考えれば」の一人を信用したりといふこと事態がむりな話しだる。

「それによお、俺たちがわざわざ組んでお前らのといへこれから奇襲しかけますって言

いに来ると思つか」

コンジンは絆創膏と赤チンだけのでかい顔に、申し訳なさそうに付いてくる小さな田

を瞬きながら、見たこともない真面目そうな顔でそつ言つた。

人のいい僕はひとまず話しだけは聞くつもりでいた。しかし、この一人を見ていると今

までのことが脳裏を掠め、むらむらした気持ちになり、本当に一人だけなら袋にするには

今が絶好のチャンスとも思っていた。

「けどよお、ちょっとでもおかしなことがあつたら、お前ら一人こじでタ」にすんだぞ、い

いな覚悟しどけよ」

「わかつてるつて、ケン。もしよお、俺たちが嘘を言つてたりタ」にでも袋にでもなつて

やつから・・・お前らとは当分、休戦、休戦・・・

ヨンホウの言葉を続けるよつてコソンジンが言った。

「とにかくよお、しばらへの間、お前らとは休戦するつもつて今日は来たんだからよお、

だから最近はお前らの前に顔を出さなかつたら

えつ、休戦？ 僕とケンは顔を見合させた。そのとたん怒りがこみ上ってきた。

「ばあか、今までりたいだけやつとて休戦だあ、ふざけんじやねえよ、このはかやろ

う。コング、鉄パイプ貸せ！」

それを受け取つて振り上げると、今度はケンが僕の肩にそつと手を置いて、にこにこしながら言った。

ながら顔を左右に振つた。ヨンホウとコングは身を引いて身構えながら言った。

「Hフ、興奮すんなつて、やりたいだけやつとこではねえじや、そんなのお互い様だろ！」

なあ、ヨンホウ・・・

「コングは普段はこんなに落ち着いたまともなやつなのかと、錯覚させないように痛くそ

の通りなことを言った。今の状況では彼らがふりなことは彼らが一番よく判つている。そ

れを承知の上でここにここで休戦するとまだ言った。まったく勝手なやつらではあるが、僕

は努めて話を聞くことにした。

「判つたよ、話はちやんときくから・・・

僕がやつて言つと「一人はほつとした表情をした。

「それにしても、お前らもすぐ顔してなんあ・・・

ヨンホウはやつ言いながらほかを見回すと、コングが言い返した。

「お前らに言われなかねえよ、お前らのほうがすげえ顔じゃ」

「ビーとやつて来たんだよ、それにしほうがすげえ顔じやてんじや」

コンジンがそう言いながらクツ、クツ、クツと笑った。それにしても不思議な光景であ

つた。この一人が僕らと笑いながら話をしているのだ。それこそ彼らと協定を結び仲良

く手と手を取り合えば中華街が平和に・・・・なんてことがあるはずはない。

「俺たちがいねえときにのこの仙人山なんか行くからこんな顔になつちまつんだよ」

僕が答えると、ヨンホウがにやつとした後、眉間に皺をよせながら言つた。

「そりや、話しが早いや」

「それ、ビービーことだよ」

ケンが不思議そうな顔をした。

「つて、ひとはよお、お前らもあのアメリカに恨みがあるつて」と
だよなあ」

「ばあか、そんなの昔つからだよ、俺たちもお前らも相手にしなき
やなんねえし、仙人山

も相手にしなきやならねえから忙しいんだよ」

僕は一人の顔を交互に覗きこんだ。すると一人はにやつとして言
つた。

「そりかそりか、実はよお、今日はその仙人山のばかたちのことを
聞きたくてよお、お前

らだつたらあいつのことを詳しいだろ」

「俺たちは学校も違つて、そんなに山手のまつにも行かねえから、
どいつもあこづらの」と

がよく判らなくてな、仕返しに行きたくても動きがとれなくてよお

確かにヨンホウは朝鮮学校での地域からは遠方だ。コンジンと
て中華街の中にある中

華学校ではあるが、山手に頻繁に出向かない限り仙人山の情報をつ
かむことは難しいであ

るわ。

「ヨンホウよお、俺たちのところへこなくとも、お前らの縄張りに

俺たちと同じ学校のや

つがいるじゃねえか

ケンが聞き返した。

「こなことほいるんだけじよお、お前らほど詳しきねえし、仙人山とやりあつてこるのは

お前らぐれえだと思つてよ」

「それだつたらロージでも連れて行けばいいじゃ、強えし、以外と仙人山のこと詳しかつ

たりして」

僕が嫌味つたらしく言つて笑うと。

「あんなばかだめに決まつてんだる」と言つてヨンホウはため息をついた。

「ロージは僕たちと同じ学年だが、低学年の頃僕らの学校からヨンホウと同じ学校に転校

して行つたのだ。僕とケンは幼稚園の頃から彼とは気が合い、朝鮮系にしては珍しく仲が

いいのだが、ヨンホウとはすこぶる仲がわるい。この場所にも時々顔を出しヨンホウたち

の情報を流してくれるありがたいお方なのだ。しかし、喧嘩をやらせたらこの地域では一

番強いのではないかと僕たちも認めている。だからこそ、ヨンホウにしてみれば田の上の

たんじぶのような少年なのだ。

「コンジンはどうなのよ」 と、僕はでかい顔を覗きこんだ。すると、
だめだめっとこう素

振りで手のひらをでかい顔の前で左右に振った。コンジンの手がや
たらと小さく見えた。

「そんなことないんじゃないのぉ・・・ほかにもいるんじゃないの
お・・・」

僕はにせにやしながら一人を見た。

そうなのだ。この一人には神様のよつに祟め、自分たちがふりな
状況においてその名前

をだせば、だいたいの連中は逃げてしまつるような方がいる。僕は
その一人を思い浮かべ

からかい加減で名前を出した。

「キートンは中華学校だから仙人山のこととは詳しくねえかもしけね
えけど、リョウがいん

じゃ、リョウに聞けよ。なあケン」「

「やうなあ、キーテンはあてになんねえな、仙人山の」となりコロウのほうがいいな」

「そんなのお前らに言われなくてもとっくにやっているよ。キーテンもリョウもあてになん

ねえからお前らのところきたんじゃねえか」

ヨンホウはそう言つて肩を落とした。

「やつぱり・・・・・・

僕とケンは笑いながら顔をみあわせた。

「実はよお、仙人山のグループが俺たちやヨンホウのところへ現れてからよお、毎日リョ

ウのところへ行つてたんだけじょお、リョウは知りませんの 一 点張りでよお。一緒に仕返

しに行つてくれつて頼んでもよお、あいつらには近づくなつて、話しつにならなくてな、だ

から、ヨンホウとも休戦して組んでやり返しに行つと思つてよお、それには仙人山のこ

とを少しばかり知つておかねえと思つて、ここに来たつて訳よ

「…………？」

「のぽかぽかした陽気の中、コンジンの演説を聞いているうちに
眠くなつて、腕を組ん

だまま目を瞑つていた。

「お前ら、失敬だな、聞いてんのかよ……？」

その声に我に返つた僕は、隣のケンに目をやつた。すると、ケン
も腕を組んだまま瞑想

中であった。

確かに敵対し合つていた朝鮮系と中国系のグループが、一時であ
れ組んでそのトップで

ある一人が僕たちの縄張りで自分をさらけだしているのは、彼らに
とって仙人山のグルー

ブは馴染み少ない西洋人で、白人、黒人ともなると得体の知れない
相手に違ひないので。

「コンジンよお、キートンにも仕返しのこと話したのかよ、うまく
動かないとやり返す前

にまた仙人山にぼこぼこにされんぞ」

僕はそうつ言いにやらせながらコンジンの顔を覗きこんだ。

「ああ、キートンにも話したけどよお、ぜんぜん粗暴にしてくんなくじよお」

「そりゃあそうだよな、中華学校を仕切つているキートンがお前らの相手なんかするわけ

ねえじや。クツ、クツ、クツ」

そう言つてケンが笑つた。

「なに、笑つてんだよお・・・・」

コンジンのでかい顔がさらりと膨れ上がり、申し訳なさそうに付いてくる皿が三角になつ

た。その不気味な顔に参つてしまつたケンは詫びをいれた。

「わりい、わりい、けどよお、キートンはそんなお人よしじやねえつてこと、お前だつて

判つてんだ。だいたいキートンは意地が悪いんだからよお

「ん、まあ、そうだけよお・・・・」

おかしい。実におかしい。今日のコンジンは素直である。いつもであればヨンホウより

コンジンのほうが手が早く、根にもつタイプである。ケンとのこれだけの会話で殴り合つ

ていてもおかしくないのだ。仙人山の情報を得て仕返しを実行するためにはプライドも捨て

てられるところだろうか。

「けどよお、キートンがいい作戦を教えてやるって言つてくれてよお、それもあつてこい」

に来たよつなもんだからよお・・・・・・

「エンジンは意味ありげににせーとした。

「えつ？　えつ？　えつ？・・・え・・・？」

僕とケンはキートンのいい作戦と聞いて身震いがした。どうせりくでもない作戦である

ことは確かだ。しかし、考えてみれば僕らには関係のないことである。そうであれば興味

津々聞くことにした。

「コンジンよお、そのいい作戦つてどんな作戦だ？」

「言ひにくいくんだけじよお・・・やつ返しに行くなうあの二人を連れて行けって言つかひ

よお・・・

「キートンが言つたじや、あの一人だな・・・けどなあ、あの一人

が行つたらたいへんな

「」とになるぞ。けどなあ、あの一人が行つてくれるかなあ？　あの二人はエフのことだつ

たら行くかもしだねえけど、お前らの頬みじやなあ・・・・どう思つよ、エフ」

そう言つてケンは困つたよつて眉を下げながら僕の顔を見た。ケンの言いつぱりで誰のことかは察しがついた。

「やうなあ、あの二人は年下の喧嘩には口を出せなこからなあ

「あつ、そつかそつか、それをエフからヤンとロンに頼んでほしいのか、それでここに来

たつてわけだ」

ケンがロンジンの顔を覗きこむと、ロンジンは一つため息をついて言つた。

「お前らよお、いつたい誰のことを言つてんだよ。誰がヤンとロンだなんて言つたんだよ。

あのヤンとロンが行つてくれる訳ねえし、得にロンにそんなこと怖くて言えつかよ」

「やうだよなあ、ロンは確かに仙人山の連中と同じような顔してゐる

しな

クツ、クツ、クツと僕は笑った。

「ヤンとロンじゃねえって」とは誰だよ。キートンはいつたい誰を連れて行けって言った

んだよ「

ケンはそう言いながら胡坐を揺らした。

「エフケン・・・お前とお前だよ!」と、コンジンは僕とケンの顔を指で差した。

「え・・・・・・・・・?」

僕とケンはあまりの驚きに胡坐をかいたまま後ろへ倒れこんだ。自分らの名前を言われ

て驚いたのではない。キートンの嫌がらせの予感が的中したこと驚いたのだ。

「そんでよお、キートンが一人で足らなかつたらお前ら三人も連れて行けって言つてたつ

け

コンジンは二ばかを見回した。

「なあんで、俺たちがお前らの仇を取りにいかなきゃなんねえんだ

「よ

「ほんとだよなあ、冗談じやねえよ」

「Hフケン、まさか、行くわけねえよね

三咲は口々に騒ぎ始めた。

「行く訳ねえだろ、なあ、Hフ」

ケンの言葉に三回頷いたが、正直なところのHンジンの様子を見て、一、二歩

回ぐらに行つてやつてもいいかなつと、少しほ情が沸いたのも確かであった。しかし。

「モンホウ、モンジン。ケンもこいつらも納得してねえから、俺らはお前らと一緒に向」

うの繩張りに乗り込むことはできねえよ。ナビよお、今度こいつらが中華街に乗り込んで

きたら、俺たちもやつから、そのかわりあいつらの弱点とか、溜まっている場所とか、聞

きたいことは教えるから・・・ケン、そのべらこばいよな・・・

・

「・・・・・ん、まあ、しじうがねえな。びつこしても俺たちは

明日仙人山へ乗り込む

から

「なんだよお、それだったら俺たちも連れていいよ、ケン」

ヨンホウはケンの言葉に田をぎらつかせた。

「だ、か、らあ、明日はこの三人のおとしまえ付けに行くだけじゃ、お前たちの仇は打た

ないって言つてんだる。わからんねえやつらだな、まったく！」

ケンがむつとしてヨンホウとコソンジンの顔を覗きこむと、一人の眉毛がピクピクと動い

た。一瞬、彼らとの間にまたもや血生臭い風が吹いた。まずい、ケンが戦闘準備に入つて

いる。しかも後ろにいる三ばかは既に立ち上がりしている。このままで僕の出番はなくな

つてしまつ。

「まあまあまあ・・・じつはしてもよお、明日俺たちが行つて様子を見てくつから、そ

んで何が変わったことがあつたらお前たちに教えるから

僕は心にもないことを言つとケンとヨンホウの肩を叩いた。

その後、モンホウとモンジンの質問攻めは続いたが、ほとんどの加減なことを並べた

てて答えておいた。やまあみろである。しかし、彼らは今まで見たこともない爽やかな顔

をして去つて行つた。

第三章 元町公園の戦い

第三章 「元町公園の戦い」

翌日の日曜日。僕らは小公園に集結していた。

小公園は中華街大通りから上海路を抜けた突き当たりに位置するしゃうじけい関帝廟通りにある公園だ。正式には山下町公園といつ名稱だが、この周辺では小公園と呼ばれていた。

山下町公園と山下公園、文字と呼び名はよく似ていたのだが、その由来も単純明解で、山下町公園と山下公園、文

字と呼び名はよく似ていたのだが、規模が比べようもなく違つ。小公園は五十三四方のごく一般的な公園なのだ

が、山下公園はあの規模だ。どう考へても山下町公園の方が多いから小公園と呼ばれて

いたのだ。と思つ。確かにどちらも僕らにしてみれば遊び場であつたが、毎日のこととな

ると小公園に集まる子供たちが多くつたのだ。

当時、小公園には様々な遊び場があり、関帝廟通りからの入口右手に砂場とドカンの遊

び場があつた。ドカンは直径一㍍、長さ三㍍ほどの大さのものが三本ほど一の字に直結

され、横向きのドカンの端には鉄の梯子がかかり、登ると幅一㍍、長さ二㍍ほど

鉄板の通路が引かれ、その先は滑り台に繋がっていた。鉄板の通路の下には一本だけ独立

したドカンもあり、それらの回りを取り囲むように、クリーム色で二㍍幅のコンクリ

ート塀が建っていた。なかなか複雑で説明しにくいのだが、当時にては楽しい複雑な遊

び場が設置されていたのだ。ただし、長さ、高さ、色などは定かでない。

公園の中心になる入口の対角線上五㍍ほど先には裏口があり、その他にもそれぞれの

通りの抜け道になる路地が何本かあつた。そして、裏口の右側には駄菓子屋、左側の奥か

らシーソーが一本、ブランコが四本、ロケット型のジャングルジムが並んでいて、その横

に町内会館が隣接していた。駄菓子屋から右側には住宅と中国系の

幼稚園もあり、今も保

育園として影を残している。

当時、この公園に集まる子供たちのお国柄も性質、性格も様々で、それぞれのパワーが

爆発していた公園だったのだ。そして、中華街になる以前に南京町なんきんまちとし

て親しまれてきたなごりからか、この公園の周辺を南京町と呼ぶ人たちが多くつたのである。

その日は午前中から快晴で暖かく、絶好の仕返し日和であった。僕らは仙人山のグループ

への報復を決行するべく、小公園の裏口から延びる路地を仙人山へと歩きだした。

ふと見ると二三ばかの手には鉄パイプと角材が握られている。殴り込みの時の鉄パイプは

いつものことだが角材は何処に隠しておいたのか不思議であった。

「おいおい、お前らそんなもんどうから拾ってきたんだよ・・・?」

「僕が笑うとパンチョが僕とケンの手元を不思議そうに覗き込みながら言った。

「そりいえばエフケンはなんで手ぶらなのよ？　あいつらこれでぶつ叩いてやんに決まつ

てんじゃ。なあ、そうだろ、コング、バッハ」

パンチョは親分気取りでコングとバッハにじりじりと田線を送つた。すると。

「そうですね。パンチョ様・・・」と、コングは切れ長の田を三角にし、バッハも二重の

クリクリした田を三角にして引きつった顔で苦笑いをしていた。

どうやら今日はパンチョが親分らしい、何があったのかは知らないが事前にコングとバ

ッハを子分にしていたようである。

「この三人はどんぐりの背比べといつたところで上下関係はないのだが、ひょんなことか

ら一人が親分になつて一日逆らつてはいけないといつ決まりがあるらしいのだが、一日ど

ころか何時間ももつたためしはないのである。

「パンチョ親分。そんな物騒なもの持つていかなくても、今日は大

丈夫だと思つんですけ

ど。もし仙人山の連中がいなかつたら邪魔でしうがないと思つん
ですけど・・・・・

前田橋を渡りかけた時、ケンがパンチョ親分に敬意を示してそ
声をかけると、単細胞

のパンチョは握つた角材をしげしげと見つめた。

「そうかなあ？・・・そうだな。一本持つてると邪魔だな、捨てる
か。おいつ、お前たち

も捨てるー。」

パンチョ親分は子分に向かつてそう叫んだ。子分たちは「がつて
んでい」と言われるま

まに角材だけを次々に前田橋の上から堀川にほっぽり投げてしまつ
た。そのとたん橋の下

から声が飛んできた。

「くおらあ、誰だあ！」

橋の上から堀川を覗きこむと、二ばかが投げ込んだ角材を握つた
おじさんぐ睨んでいた。

中華街と元町を結ぶ前田橋の下には堀川が流れている。当時、こ
の堀川から延長する中

村川には船を住居にしている人たちが大勢いて、船から学校へ通つていた子供たちがいた

のだ。だから川の両側には船が隙間なく停泊していたわけで、そこへむやみに物を投げ込

んではいけないのだ。しかも角材を投げ込むなんてもつてのほかだ。僕らは反省をしてき

つちりとおじさんに挨拶をしておいた。

「うむせえんだよ、このばあか！ 悔しかつたらここまで来てみろ！」

五人揃つてあっかんべえをすると逃げるように前田橋を渡り、突き当たりの元町裏通り

から近道の崖を登り、密林を抜けて仙人山の通りに出たのであった。

そして、代官坂へ下る石段から山手通りまでの一帯を四方八方に散りながら、サンダー

バードたちを見つけるべく行動を開始したのであるが、静まりかえった外人ハウスには人

影はなく、彼らを見つけだすことは困難であった。

あきらめが早いのも僕らのいいところである。さつそく次ぎの目的地である元町公園へ

移動を開始した。

浅間坂の長い石段を下つて代官坂を右に登り、元町公園へと続く百mほどの道を左に入

つて行くと、奥に進むにつれて太陽は樹木に塞がれ、元町プールの正面にたどり着くころ

には空氣もひんやりしていくのだ。

元町プールは小高い森に囲まれていて、何処から登つても山手通りに出ることができる

のだが、ちょうどこのプールの上あたりがエリスマン邸あたりである。

そして、プールの正面から石段を降りると子供プールがあつたのだが、現在では姿を消

し噴水が設置された落ち着いた空間に変わっている。

夏になるといつこの辺りは僕らのような迷惑な子供の歓声でにぎやかになるのだが、シーズ

ンオフは日曜といえども静まり返っているのだ。その日も同様であった。僕らは出入口

になるチケット売り場の前に座り込むとさつそく作戦会議を開いた。

「エフよお、もしここに仙人山がいたとしても人数が多くつたら突つ込んで行けねえよな」

「まあな、十人ぐらいいたら様子を見たほうがいいよな。けどよお、トッポジージョとブ

スカは昨日と同じで六人でつるんديいることが多いからよお、トッポジージョさえ見つ

け出せばなんとかなるつて」

「そしたらよお、六人だつたら五人で一気につぶすか?」

「そしだだなあ、あいつらが六人だつたら俺とケンより年下の三人は三ばかに任せて、トッ

ポジージョたちは俺とケンで・・・」

その時、バッハが顔をさつと上げて。

「あんな三人どうでもいいからさあ、トッポジージョたちは俺らにやらせてよ、ぶつたた

いてやるよ」これで・・・

バッハはそう言いながら鉄パイプをアスファルトに打ちつけてコングとパンチヨの顔を

覗き込んだ。

「ナリだよ、あの年上の三人は許せねえから俺ら三人がやつてやる
よ」

そう言つてコングはパンチョの肩をたたいた。すると。

「おいおい、お前らよお、なんで俺より先にそつこいつ発言をすんだ
よ。十年早いんだよ！」

と、パンチョが怒鳴つた。パンチョはバッハとコングの親分であることを覚いたが、バ

ッハとコングはすっかり忘れていた。

「そうだった、そうだった。親分、申し訳ねえ、すっかり忘れていて、じや、どうぞ・・・」

コングは引きつった笑みを浮かべたまま手のひらを上に向けて前に差し出した。

「わかりやいいんだよ、わかりや。まつ、しつかり借りを返すのが俺らのやりかただから

な」と、パンチョは氣をよくしたのか咳払いを一つした。すると。

「親分、言いたいことはそれだけですか？」

と、バッハは大きな目を細めながらパンチョの顔を覗き込んだ。

「そんなことはねえよ、だ。か、らあ、あの三人は俺らがやんだよ」

「おやぶーん、それは僕が言いましたけど・・・」

「コングは追いうちをかけるが如くそつ言つて呴きついた笑みを浮かべた。すると、パン

チヨは真つ赤な顔をして言い返した。

「うるせえなあ、まつたくよお、口答えばかりしゃがって、この口がまだ言つか！」

と、コングの唇をつねりあげた。

「んがあ、おやぶん、いだいですよ」

と、コングは笑つているが、田は笑つていない。このくんで止めなければ仕返しを決行

する前に血爆してしまつ。いつもそうなのである。結局、親分「こは」一対一で親分が

ふりになるものなのだ。

「ばあか、いいからも「うやめろー」

ケンが立ち上ると三人の頭をはたいた。しかし、気がおかまらないのはパンチヨであ

る。コングはそっぽを向いてしかと、バッハはその光景を見ながら手を叩いて笑っている。

パンチヨは下唇を突き出したまま下皿づかいで一人を睨みつけていた。

「とにかくよお、トップポジージョたちをお前らにやらせたら俺たちが来た意味がねえじや、

なあエフ

ケンはそう言いながら握った右拳を左の手のひらに叩き付けた。

三ばかは僕とケンがいる」といつも以上に強気でいる。昨日のことを思えば三ばかの

気持ちも判らないではないが、この辺はあいつらの地元と言つてもいい地域だ。油断をして

いれば何処からともなく人数が増えだす危険性は多分にあるし、三対三であれば三ば

かにも勝算はあるが、今までの経験上トップポジージョとブースカはなかなか手ごわい、サ

ンダーバードたちの人数しだいではきれいとは言つていられなくなり、展開も複雑に変

化していくだろ?。僕とケンにしてみればサンダーバードたちが一度と三ばかに手をださ

ないようには傷めつけなければケンが言ったように来た意味がなくなつてしまつ。

「そしたらよお、あいつらが三人しかいなかつたらお前たちにやらせるから、けどよお、

それ以上いたらこの中で一番強いケンちゃんが一人でやるからよお。・・・」

「冗談半分の僕の言葉に二ばかはケンを見ながら二度頷いた。

「えつ？・・・Hフよお、冗談だろ？」

ケンは太い眉毛を八の字にしてこまつたような顔をした。

「ケンちゃん、冗談ですよ・・・三人以上いたら全員でやる。けどよお、もし、黄金バツ

トやジミー、ジョンがいたら隠れてろよ。絶対に見つかるなよ。いな」としても俺たちが

行くまで手をだすなよ、わかつたか？」

僕はそつ言いながら二ばかを見渡した。

「ああ、ああ、あれな、そうだな、また連係プレーでいくかあ、クツ、クツ、クツ」

僕とケンは笑いながら立ち上がつた。

そして、僕とケンは元町プールの入り口から左側の森へ、三ばかは右側の森へと一手

分かれて行動を開始した。

ケンと森の丘を登り始めてくると、すばらしことに座についた。

「ケン・・・探し回るのも面倒だからよお、あとはあいつら三人に任せて休んでようか」

ケンは嬉しそうな顔を僕に向けると言つた。

「Hフはすばらしことを思つてくな。いこいと書ひじや」

と、こうことで、ケンと一人山手通り手前のベンチに腰掛けてのんきに休んでいた。

はじめからそのつもりである。面倒なことばかにやらせておけばいいのだ。

「ケン・・・」うち側には誰もいねえな

僕は探そうともせずに勝手に決めつけたが、以外ときまじめなケンは辺りをきょろきょろしながら探していた。

「Hフ・・そここの通りを張つていたほうがいいかもな

ケンは山手通りを指でさした。僕は探そうともせずに次ぎの場所を考えていた。

「ケン・・・」これは誰もいなそつだからフランス山へ行くか・・・

「わうだなあ・・・」と、ケンが眉をしかめたその時だった。

僕とケンを呼ぶ声が森の中をこじました。

「あれえ・・・まさか、もう見つけちゃったのかよ。ゆっくり休んでいられねえじゃ」

「ハフ・・・向ひ側の広場だ。行ってみるかあ

そういうながらケンが指をさしたのはエリスマン邸の裏あたりだ。

僕とケンは見つかれないよう、いったん森の中を下り舗装された道を走り、反対側の

森の丘を駆け上がった。

広場に出ると二十ほど先で、サンダーバードしき連中を鉄パイプを振りかざしながら

ら追いかけている三ばかの姿が目に飛び込んできた。まったく人の言ふことを聞かない恐

ろしい三人である。

「しょうがねえなあ、もつ始めてるよお・・・

ケンはそう言いながらあきれ返った顔をした。僕はあわてて三人を呼び止めた。

「コーング！ バツハー！ パーンチョ！」

僕が呼ぶ声を聞いて、三ばかは足を止めてこちらに顔を向けるなりニヤリとした。それ

と同時に仙人山の連中は固まりはじめ、三ばかの前に三人、その後ろに三人、ふてぶてし

い形相で僕らの方を見据えている。どうやら、前列で睨みをきかせているのはトップジー

ジヨたち三人だ。それ以上年上の連中はいないようである。その時、三ばかが飛びかかり

そうな動きを見せた。

「ばーか、お前ら手をだすな！」

僕は三ばかを制した。

「ケン・・・面倒だから一人でやつちまうか？」

ケンの顔を見ると「OK、OK！」と、ケンは右こぶしを左の手の平に叩きつけながら

首を右に傾けた。僕とケンには戦闘態勢に入つてから相手にむかって行くときに独特のポ

ーズをとる癖があつたようだ。僕とケンにしてみれば意識的にしていることではなかつた

のだが、自然にあごを引きながら首が右に傾いていたりして

僕とケンは首を右に傾けるとあごを引いた。そして、トップジャー
ジヨたちを睨みつけな

がらゆっくりと近づいて行つた。

彼らまで五三ほど近づいた時、左側にいたケンが声をあげた。

「」おら、お前えら、よくも昨日はやつてくれたなあ！ さつちり返してやつからなあ！

彼らはフンと鼻をならすとニヤリと笑つた。その人を見下したような顔を見た時、僕の

感情は一気に頂点へと登りつめた。

「いのやひつ！・・・・

僕は先制攻撃をしかけるべく、ケンより一步前へでると、トップジャーの二三前まで

近づいた。すると、トップジャーたちの後ろにいた三人が後ずさりをはじめ、目を丸く

して「OH！」と叫びながら、まるで化け物でも見たかの形相で逃げ出した。僕の顔を見

たとたん逃げ出すとはたいへん失礼なやつらだ。しかし、初めからざこには用はない、さ

つさと尻尾をまいて逃げてくれたほうが手間がはぶけるのだ。だが、彼らはただ逃げた訳

ではない、仲間を呼びにいった可能性が高い、わざと終わらせなければ、危ない、危ない。

と、その時、勢いよく近づいた僕の左頬にトッポジージョの右フックが「ガツツーン！」

とカウンターとなつて食い込んだ。この瞬間、奥歯がほつぺたの裏側に「グニユッ」と突

き刺さつたのが判つた。

先制攻撃をしかけようと近づきすぎた僕がトッポジージョの先制攻撃を受けてしまった。

我ながらにして間抜けである。しかし、パンチの威力はたいしたことない、いかにも

やられる前につい手がでてしまいました。御免なさい、といった腰

の入っていないパンチ

で脳が揺れるまでのことはない。ところが、その瞬間、すばやい速さでケンがトップポジー

ジョの急症を右手で払っていた。と、思つたらしつかり握っていた。

ケンは急症を握りながらにやつと不気味な笑みを浮かべ、急症から手を離すと殴りかか

つてこようとしたブースカの顔の前で握っていた拳をパツと開いた。すると、ケンの指先

がブースカの両田にチヨン、チヨンと当たった。たまらないのはブースカである。「AO

「Hー」と叫び両田を押さえながら膝をついていた。そして、ケンはもう一人に飛びかかつ

ていった。

その間、僕はトップポジージョの左のつま先に右足のかかとをおもいつきり蹴りおろして

いた。かかとにグニューっといつ感触があつたとたんトップポジージョの口から「OHー」

と声がもれた。効いてる、効いてる。今がチャンスだ。左手でトップポジージョの首を横か

らガシツと押さえつけ、右拳でわき腹を素早く連打し、両耳を両手でつかむと引つ張り上げた。すると、トッポジージョは背伸びをしながら、まるでムンクの叫びのような形相に

なり「OH-OH-OH-」と小刻みに声を上げた。

その時、僕のおでこは、ビリ見比べても高くて形のいい憎き鼻に標準を合わせていた。

そして、トッポジージョの両耳を握つたまま僕はおでこを憎き鼻に振り下ろした。

「ガツツーン」という音とともにチヨーパン（頭突き）はみ^アヒトツポジージョの鼻に炸

裂した。と、思いきやトッポジージョの体から力が抜け崩れ落ちる瞬間だつたため、頭と

頭がごつっこ状態であった。

まだまだ僕のチヨーパンは甘い、朝鮮系のダイヤリョウのもとで修行を積まなければならぬ

らないようだ。

しかし、どうやら僕の頭のまづが固かつたようで、トッポジージョは急症とおでこを押

さえながら崩れ落ちていった。

その時、ブースカたちがケンの隙をついて逃げていった。それを三ばかが追いかけよう

としたが「追いかけるなー」とケンが三人を制した。深追いは確かに危険だ。けしてブー

スカたちはただ逃げて行ったわけではない。そんなにあまい連中ではない。仲間を引き連

れて必ず戻つてくる。ケンもよく判つているのだ。

僕は三ばかを見張りに立たせた。ケンは近づいてくるなり、横たわっているトッポジー

ジョに馬乗りになつた。そして、胸ぐらを両手で掴んだ。僕は苦痛で顔をしかめているト

ッポジージョの頭の横にしゃがみこむと、その顔を上から覗きこんだ。

「お前えよお・・・昨日はよくもあいつらをやつてくれたなあ・・・
それと雪の中に石を

入れてぶつけたとかなんとか・・・いつまでもつまらねえこと言ひ
やがつてよお、面倒く

せえから石じと口の中に突つ込んでやうつか?」

僕は手元にこりがつていて、十cm大の石を掴んで、トッポジージョの腰に押し当てる。

トッポジージョは「アハッ」と唾を出しながら顰めた顔を左右に振った。

「おー、俺たちは向もせつちやねえから、勘違いすんなよ。」のばあか

そう言つながらケンはトッポジージョの頭をはいた。すると。

「お前たちじやなくとも……お前たちのボスがやつた。だから、お前たちにも責任があ

るんだ……」

トッポジージョは唾をためながら口元も開いた。

「ボス……？ ボスって誰のことだ？」

僕はトッポジージョの眼を開きこんだ。すると。

「あいつだ。お前たちひとつ上の……」

トッポジージョの青い玉玉がジロッと上に動いた。そのとたんトッポジージョの胸ぐら

を掴んでいたケンの手元に力が入った。

「ばあか、お前え、リョウのことを言つてんのか？ リョウは俺たち

の親分でもなんでもね

えよ。リョウはなあ、親分とか子分とか好きじやねえんだよ。何にもわからねえでつま、

らねえこと言つてんじゃねえよ

ケンが皿を吊り上げて、掴んだ胸ぐらを持ち上げると地面に叩きつけた。トップポジージ

ヨは軽く咳き込んだあとゆづくつと口を開いた。

「あいつは日本人じゃないよな・・・」

そう言いながらトップポジージヨは苦しそうな顔で僕を見上げた。

「おい、リョウが日本人じゃなかつたらなんなんだ?」

僕がそう答えると、ケンが何かを思いついたように声をあげた。

「そつかあ! だからお前たちは無差別に中華街の連中を狩りはじめたのか、けどよお、

なんでお前らは、あんな雪の上とそんなんむきになつてんだ?」

「あいつはあの時、デビーの弟を何度も、何度も、わざと攻撃していたんだ」

「デビー? あれはデビーの弟だったのか?・・・」

僕はケンと顔を見合せた。

「やつだ、デビーの一番下の弟だ。お前たちは知らなかつたのか？」

トップポジージョはやつ言つて不思議そつな顔をした。僕とケンは目を丸くした。このデ

ビーとこいつは仙人山のグループを影で操る大ボスである。普段は姿を見せず、それこそ

僕たちを相手にするようなレベルのお方ではないのだ。

「だから、お前らはデビーの命令で中華街を狩りはじめて、リョウをおびき出そつとしたのか？」

僕が質問すると以外な言葉が力強くかえつてきた。

「ちがつ・・・あいつがデビーをおびきだそうとしたんだ。あの時だけじゃない。あいつ

はもつと前からデビーをおびきだす為に俺たちにも嫌がらせをしてきたんだ」

「ケン・・・こんな話リョウから聞いたことあるかあ？」

ケンは黙つて首を左右に振つた。

「だいたいよお、なんでリョウがデビーをおびきだそつとするんだ？」

僕はそつ言つてトップポジージョのおでこを叩いた。

「わからない、それは俺たちにもわからない・・・」

トップジージョは首を左右に振つた。

思い返してみれば・・・あの日、確かにリョウは三ばかよりも年下であろうう一人に狙い

を絞つて、石を入れた雪だんごで集中攻撃をしていた。しかし、それが何のためなのか、

リョウはなぜデビーをおびき出そうとしているのかは、その時の僕とケンには理解不能で

あつた。

「どうぞこじしてもよお、お前らが朝鮮狩ろうが中国狩ろうが、リョウ
ウはびびつやしねえか

ねえからうし、年にはかり粗ひんじやねえよ。お前の上に黙つておけ、いそな」とぐ

「いこじやあのつ四つは動かない」とおもふ

すると、トッポジージョは首を起し、これまでに言ひ返した。

「ふん・・・それはそのうち俺たちの仲間が行くから、それにお前たちもこれからは気お

つけたほつがいいぞ」

トツポジージョは口を半分吊り上げてふてぶてしい笑みを浮かべた。彼にも意地がある

のだらう。」の場に及んでも強氣の態度は変わらなかつた。

「ばあか、来るならこつでも来いよ。相手になつてやつから、なあ、エフ・・・」

「その通り、ケンちゃんの言ひ通り・・・ナビよお、いいか一度と関係ねえあの三人には

手を出すんぢゃねえぞ。」とさぢやつたらじのぐれえじゅまさねえぞ、わかつたか?」

僕はそつ言いながら一発頭を殴つた。すると「お前え、わかつてんのかよおー」と、ケ

ンは握つていた胸ぐらを引つ張つあげて、地面に呑きつけた。ケンの迫力にトツポジジー

は皿を丸くして一回傾いた。

「ケン、行け、ばつば、こつまでも」「ここになると危ねえからよ、とんづら、とんづら」

「それもやうだな、行け、」のばあかー」

ケンはそう怒鳴つて胸ぐらを離し、トップポジージョを睨み付けながら顎で指示をして立

ち上がつた。同時に僕も立ち上ると、トップポジージョはムクつと立ち上がり、山手通り

方面に走りだした。

僕の口の中は先程から鉄のよつた味で充満していた。僕は歩きながら溜まっていた唾を

おもいっきり飛ばした。唾は真っ赤な血に変わり若葉の上に飛び散つた。

僕らは辺りを気にしながら元町公園の森の中を駆け下りていった。
元町プールのチケット

トつ売り場まで来た時・・・仙人山のグループの騒ぐ声が森の中に響き渡つていた。

危ねえ、危ねえ、とんづら、とんづら・・・・

第四章 特別家庭訪問

第四章「特別家庭訪問」

明治六年に創立されたこの小学校から「じれり」との数の生徒が卒業して行つたのだろう。

正門から校舎まで心臓破りの上り坂が一十石ほど続き、左側には公園のような下庭が広

がつてゐる。この上り坂は坂の多い山手を象徴した学校の顔とも言えるのだ。

坂を上つると左側には、この学校のもつ一つの顔と言ふる長いすべり台が、校舎と下

庭をつけようつて一列で設置されていた。このすべり台は十五石ほどの長さがあり、中間

地点が三十四石ほど平になつていたため、上から一気にすべり降りて行くと体がバウンス

して、時にはコースから外れて下までころげ落ちたり、すべり台の板版がはがれている

とにかく半ズボンの又を引っ掛けでスカートに変身させて帰つたこともあつた。当

時にしてみれば画期的なすべり台だったのではないだろ？が。しかし、このすべり台も姿

を消し、下庭の奥に設置されていたプールは校舎側に移され、プール跡はきれいに整備さ

れた。そして、校庭の横にあったプレハブ校舎は昭和四十六年に取り壊され、クリーム色

で覆われた鉄筋コンクリートの校舎は昭和五十九年に建て直され、校舎の中にあつたスロ

ープと共に思い出の中へ消えて行つた。

しかし、当時この学校には、暴れん坊だった僕のクッショニ的な存在が何人かはいたよ

うで、その中でも三、四年の担任だった近藤先生が一番のクッショニ的存在だった。

五月も半ばになつた頃であつた。昼休みに職員室までどりで、といふ近藤先生からのお

誘いがあつた。僕のような問題児には足が進まない場所である。しかし、出頭命令が出て

はしうがない、行つてやる！じやねえか・・・職員室のドアを開けた。

「うわっ！」

な、なんなんだ？ 僕に突き刺さりそうな先生たちの視線、先生全員が今にも飛び掛つ

てきそうな空氣、しかも、担任の机がドアー近くであればいいが、僕の担任のように奥だ

つたりするとたまたもんじゃないのだ。

近藤先生の前に立つと先生は僕の顔を見て笑顔を見せた。しかし、先生の奥側の隣には

宿敵鉄人28号が座つていて。この男の先生は鼻のトンガリ具合と中途半端な二重目が鉄

人28号に似ていたためそう命名されたのだが、やたらと僕たちのクラスに顔を出し、悪

さをした生徒のケツを竹刀でたたくのだ。こないだもこの鉄人28号は僕とクラスの悪友

であるタカとアツの可愛いお尻を三発もやりやがった。

僕の推測では、近藤先生はやんちゃな連中が多いこのクラスに一生懸命取り組んでいた

先生であつたから、悩むことも多かつたはずだ。そんな女心の隙間に入りこんで美しく独

身であつた近藤先生に氣に入られよつと「近藤先生、すべて僕にお任せください」とかな

んとか調子よくたぶらかして余計なことばかりする大変迷惑なやつなのだ。

僕はアツとタカの思いも込めて下唇を出したまま鉄人28号を睨みつけていた。

「島津くん・・・どう見てんの？・・・」

「あつ、いや、あいつをいつか返り討ちに・・・」

「島津くん・・・返り討ちつて、誰かを返り討ひにする予定でもあるの？ いいかげんに

そういう下品なことはやめましょ

うね
「そうはいかねんだからじょがねえじや、俺だけの問題じやねえんだから・・・」

僕は鉄人28号の背中を睨みつけた。

「そうそつ、返り討ちつていえば、最近、小耳に挟んだんだけど、島津くんたち、アメリ

カンスクールの生徒と仲が悪いそつね、顔がきれいだから喧嘩はしてないよつだけど・・・」

「先生さあ・・・顔がきれいなのは俺たちのほつが強いつて証拠じ

や、それより、誰がそ

んなこと言ったんだよ……さひだい・・・あこつか、お母ちゃんんだ
ろしだい・・・

「誰でもいいでしょ・・・それよりその、じゃ、じゃ、じゃ、俺上
お、俺おもつて言葉づ
り葉づり・・・

かこどうこかならないの? 横浜の言葉だらつナビ、自分のことと
僕とか、せめて女の子

のよひに、なんとかじゅーんとか、なんとかなりなこの・・・

「まへりーつてなんだよ、そんな女みてえができる駄ねえじ・・・

「・・・・・・・・・とかへ、もつじじ上品な言葉を侮うこと、わ

れど、アメリカンスク

ールの生徒には近づかないといいわね・・・

「先生さあ、それだけ? そんなことで俺を呼んだのか? 」

「もひるんやんなことで来てもういたわばじやないわよ。でも、島
津くんと話してると気

になること、まかりで・・・・・・やしたち本題につくるわ。明日の
土曜日の午後なんだけ

ど、もし、お母さんの都合がよかつたら、お家におじゃましてお母さんにお話したいこと

があるのね・・・

「えつ？ 先生また来んのかよ？ こないだも來たじや」

「あの時は家庭訪問でしょ、今回は特別・・・」

「じゃあ、今度はなんで来んのよ、こなーだことをお母ちゃんに言いに行くのかよ？」

僕はそう言いながら鉄人28号を睨みつけた。

「えつ？ こないだのことって？」

近藤先生は驚いた顔を僕に向けた。

「なにして、竹刀でやられたことだよ」

僕は鉄人28号に向かって顎を振った。すると、鉄人28号が目線を送つて來た。負け

じと下唇を出して睨み返すと、鉄人28号はにやりとして不気味な笑みを返してくるでは

ないか、僕は身震いがした。

「そうじゃないわよ。そんなこと話したらお母さん心配して学校まで来ちゃうわよ」

先生はそう言つて笑つと、僕の疑い深い顔を覗き込んできた。

「まつたくだよ。なんでああやつて何かあると学校にくるのかなあ、俺、まいつちやうよ」

「いいお母さんじやないのぉ、それだけ島津くんのこと心配してんだから・・・そりやう、

お母さんねえ、島津くんが三年生の時、島津くんを文学青年にした
いって、いや、したか

つたかな？ そう言つてたことがあつたのよ

近藤先生がそう言つたとたん、鉄人28号が「普ッ」と吹き出し、
口を押さえながら笑つのをこらえ

ていた。とこより完全に田は笑つてゐる。僕には文学青年といふ
ものがどのような人種

なのか理解できなかつたが、鉄人28号が失礼なやつだといつこと
は理解できた。

「なに、笑つてんだよお・・・・・」

僕がそう呟くように言つて鉄人28号を睨みつけると、鉄人28
号は近藤先生に気づか

れないよつこ静かに両手を合わせて謝るような仕種をしたが顔は笑
つてゐる。そんなこと

より文学青年という人種のことが気になり先生に尋ねてみた。

「先生・・・文学青年ってどんなやつよ」

「そうねえ・・・文学青年ねえ・・・たとえば本をたくさん読んだり・・・あつ、そつそ

う、ここに居るじやない、文学青年だった先生が・・・」

近藤先生は何を血迷ったか僕に向けていた椅子から振り返ると鉄人28号を指で差した。

「冗談じゃない！ 僕は鉄人28号を下目使いで睨んでやつた。すると、鉄人28号は人

指し指で自分の顔をつつつくように差しながら嬉しそうに頷いている。まつたくどつしょ

うもないやつである。僕は鉄人28号を睨みながら言つた。

「冗談じゃねえよ、俺はいやだねえ、そんなのになるのは・・・でも俺だって本ぐらい読ん

であるよ」

近藤先生はびっくりした顔をして。

「へえ、そうだつたんだあ、それで島津くんはどんな本をよんでものお？」

僕は自慢げに答えた。

「少年マガジンにサンデーってことかな、キングもあつたな」

すると、鉄人28号は音を立てずに大きな動作でゆっくりと手を叩き、僕を横目で見な

がら声を出さずに笑っていた。

「笑つてんじや、ねえよ、まつたくよお・・・」

僕は声のトーンを上げ鉄人28号を睨みつけた。すると、近藤先生は周りにを気にしな

がら言った。

「島津くん・・・さつきから落ち着かないようだけど、何か気に入るのぉ?」

そう言いながら近藤先生は鉄人28号の方に頭だけ振り返った。近藤先生と目が合って

しまった鉄人28号は、目を見開くとあわてて自分の顔の前で手の平を大きく振った。

僕は鉄人28号を睨みながら考えていた。どうして僕の周りにはこういった大人どもが

多いのだらうかと・・・

結局、先生は母に話したいといつ内容をはつせりとは口にせず、楽しみにしてねえ、

といつ氣になる言葉を残すだけだつた。だか、先生の様子からしてそれほど悪い話しでは

なさそうである。そんなことよりも昼休みの残り時間が気になつていた。

学校から家に帰ると珍しいことに人影がなく、唯一、おかえり、と僕を迎えてくれたの

は猫の軍団だけだつた。

事務所を抜けて台所の右側の階段を勢いよく駆け上がりしていくと「おひ、おかえり！」と、洋服職人の

横山さんと佐々木さんの声が威勢よく返つてきた。

誰もいないうえにやっかいな一人が、しかも一人きりでいる。このおじさんたちは僕の

顔を見るとくなことを言わない、しかも父が加わつたりしたらその場から逃げ出したく

なる。まあ、我が家三ばかトリオといつたといつだ。母から言わ

せれば僕も含めて四ば

かトリオらしいが。

横山さんの通称は横さん、四十歳台で奥さんもこの職場で手伝いをしている。佐々木さ

んは二十歳台の独身で通称はさとうちゃんである。そのほかにむし、四人の職人さんが出入

りしていたのだ。

この職場で縫われている洋服は男性用のスーツがおもで、室内の真ん中には縦3m、横

1・5mほどの裁断用の台がテーブルの如く置かれ、鉄のかたまりのようなアイロンが幾

つも並べられ、天井からはスチーム用のポンプが何箇所かにぶる下がっていた。そして、

壁際には黒い大砲のようなミシン台が五台ほど並び、所々に頭と足のないマネキンが型紙

に包まれて立っていた。

僕は階段横の畳部屋にランドセルをほっぽり投げながら「おかあちゃんは？」と一人に

声をかけた。すると、顔中を覆っている無精ひげをなでながら横さ

んがにやつせながら言

つた。

「エフ坊……明日、担任の先生が来るんだってなあ……」

僕は横さんが知っている」とびっくりしたが、それをすっかり忘れていた自分にもび

っくつしていた。

「そんなこと、なあんで知ってんだよお？」

恐る恐る横さんの顔を見ると、横さんは仕事台の上に広げた生地にハサミを入れながら

言った。

「さつきよお、先生から電話があつたらしくてな、おかみさん、また、エフちゃんがなに

かしでかしたみたい、つて言つてな、怒つて家を出て行つちまつて

よ、あの様子だともう

帰つてこないかもな

「おかみさん、家出しちゃつたりしてね

いつも言つてばかりやんね!!シンを踏みながら笑つてこる。

「ええ、家出？　お母ちゃんがいなくなつたら、お父さんが怒る
じゃ」

「わうかなあ、社長はもてるからなあ、心配しなくてもすぐ�新し
いお母さんが来たりし

「ね

わざわざとは顔だけ僕に向けながらこむじつとした。

「・・・・・

僕は黙つて爪を噛みながらひむかわざとのとがつた顔を見ている
じ。

「それよつさあ、Hフ坊は退学にならひつたりしてね、ねえ横さん。
・
・

「わざわざと、退学つてなによ。」

僕が聞き返すと、わざわざとひづいた。

「退学つてね、学校側からもつ學校に来てななくていいよつて言われる
ことだよ。でもね、血

分からもつ學校へは行きませうつて言ふのと、いつのものある
んだよ」

それを聞いた僕は意味もわからずうれしくなつた。

「わやわややん、やつなれば勉強しなくていいんだ?」

「ん、まあ、やつこいつになるとなるのかな」

「じゃあ、それのほうがいいじゃ」

「けじょお、エフ坊、残念だが義務教育の小学生じゃそれはねえかもな」

横やんは握っていたでかいハサミを向けながらがっかりすることを言った。

「なんだえ、退学にはなんねえのか、わやわやん、嘘ばっか言うんじやねえよ、期待してそんしたじゃ」

僕は退学の意味もわからないまま階段を駆け下りて行った。そして、事務所のソファー

にどかつと腰をおろし横山、佐々木両氏が並んでいたことを覚えていた。

おじさんたちがいつも僕のことをからかうのはよくわかっているつもりだ。だが、どこま

でが本当に嘘なのか理解しえないのである。

退学かあ・・・退学でえになれば勉強をしなくていいのかあ・・・

・でもなあ、義務な

んとかだからそれはむりだつて言つてたよなあ・・・そんじゃ、退学ちゅうのになるには

ビハビしたらいいんだあ・・・・

それはやうと、お母ちゃんは何処に行つてしまつたのだろう。もしかしたらあのお母ち

ゃんのことだ、学校に出向いて行つて今頃近藤先生の話を聞いているのかもしれない。そ

して、話を聞いた後にがっかりして、本当に家には帰らず新しいお母ちゃんが来てしまう

のだろうか。いや、そんなことはない、近藤先生は悪い話しひでないと言つていた。いや

待てよ、あの時、鉄人28号に氣を取られていた僕の心の中に疑問が渦巻いた。本当にそ

う言つていだけえ・・・? よく判らなくなり頭をかきむしった。すると、膝に乗つてい

た猫が逃げるよに膝の上から飛び降り、僕の足元で尻を向けたままじつとしていた。今

だ! 尻尾をあげ大きなまたまを人指し指でふるん、ふるんと揺すった。なんだか気分

がすつきつした。

その時、玄関の引き戸がガラガラーと音をたてた。帰ってきた母の姿をみて少しほっとしていた。

していた。

「お母ちゃん、何処行つてたんだよおー！」

僕は怒鳴つた。

「お使いよ、ほひ、近藤先生の中華菓子好きでしょひ」

母は呑氣な顔でそう言つと、小脇に抱えていた中華菓子の折り詰め箱を玄関から僕に見

せた。すると「あっ！」と思いついたように顔色を変え玄関から飛び込むように僕の前に

しゃがみこんだ。

「Hフちゃん、先生からあなたのことで相談があるつて電話があつたわよ。くわしい」と

はその時についていふから、正直にいいなさい、何をしたのよ、また喧嘩、なんなのといった

い何をしたのよ？」

母は不安そうな顔でまくし立て僕の両膝に手を置くと顔を覗き込

んでもた。

「俺はなにもしてねえよー。」

「悪いことばっかりしてると、また学校へ来なくていいって言われちやうのよ」

「お母ちゃん、俺知ってるよ。それ、退学つていいだろ。退学になることある、もう勉強は

しなくていいから、だから俺は退学を一回べらざりでやつてしまいかなかって思つてん

じや、ナビ、義務なんとかでむづりばっかり、まったく残念だよ」

僕はわざと仕入れたネタをこじらせて放った。

「はなたは・・・なに、ほかなことばっかり言つてんの、意味が判つて言つてんの? 誰がそ

んなこと教えたの、お父さん、それともおじさんたち?」

「そんなの誰だつていいじゃ、内緒だよ、それよつとあ、確か近藤先生は悪いことじやな

いから楽しみにしていてねえつて言つてたんだから、心配すんなつて

僕はそう言つて母の肩を叩いた。

「本当にやつて言っていたのよ、あなたの言ひことはあてにならないんだから」

「本当だつてえ、明日になればわかるんだから、それに退学ひゅうのがやれんかもしね

いし

「なにが、退学ですか・・・もひ・・・」

母はため息をつくと立ち上がり一階へと走りだした。

やつ、べえ・・・僕は玄関から外へ逃げだした。

そして、翌日の午後、近藤先生は約束通りに我が家へやってきた。

先生の話しさは、僕が猫のことについて書いた作文のことであった。
我が家は猫屋敷で少

ない時で十五、多い時にはのらもあわせる三十五ぐらいのこと
もあつたから、猫の観

察にはもつてこいの家であったのだ。

しかも先生はその作文を新聞掲載に推薦したいと言つてくれたそ
うだ。

この話しを聞いて天と地がひっくり返つたのは僕よりも母の方だ
つたに違ひない。先生

には申し訳ないがその頃の僕には作文がどうなるかがどうでもよかつたし、興味も示さなかつたようだ。

その後、候補は何点かあったようだが、近藤先生の推薦とがんばりのおかげで作文はめ

でたく新聞に掲載されたのだ。母の脳裏には諦めかけていた文学青年の文字が再び浮き上

がってきたようだが、母の喜びと期待もみるみるうちにじょんいくのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1976d/>

チャンドラ - 中華街の星たち -

2010年10月15日20時45分発行